草野心平研究資料集

第1巻

詩

一九二三（大正一二）年～一九四四（昭和一九）年

クロスカルチャー出版

凡例

一、本書は『草野心平研究資料集』第1回配本（全3巻）の第1巻である。

一、本書の底本には、詩誌、雑誌、新聞などに掲載されたものを使用した。

一、復刻に際し、読者の利用の便に鑑み、適宜拡大縮小等をして収めた。

一、本書の底本は下記の通り。

第1巻　詩　詩誌、雑誌、新聞などに掲載されたもの

第2巻　詩　詩誌、雑誌、新聞などに掲載されたもの

第3巻　翻訳詩、随筆、評論　詩誌、雑誌、新聞などに掲載されたもの

一、第2巻巻末に、澤　正宏氏による解題［書誌］、小論、第3巻巻末に解題［書誌］を付した。

目　　次

第1巻　詩　1923（大正12）年～1944（昭和19）年

1923（大正12）年
詩「無題」…… 2
詩「赤い夕月とまつてゐる」…… 3
詩2篇「虫よ」「まんだらな夕景」…… 4
1924（大正13）年
詩「淋しい一本道」…… 5
詩2篇「少さな書齊兼寢室の悲劇」「無題」…… 6
詩2篇「秋の僧院」「居留地夕景情緒」…… 7
詩「月夜の馬」…… 8
詩2篇「月夜の冒瀆―古代埃及叙景詩―」「月夜の遠火事」…… 9
詩2篇「魚形水雷の如く」「革命を前に」…… 10
詩2篇「ゆがんだ顔」「ベンチにて」…… 11
詩「夜更け」…… 12
詩「怠惰な風景」…… 13
詩3篇「合歡木と月」「かなしさ」「カンナ」…… 14
詩「秋の朝（―南支廣東にて―）」…… 15
1925（大正14）年
詩6篇「マリー・ローランサンとぼく ―或る夢の貌―」「蛙になる」
「失戀者と蛙」「春」「春の刺戟」「青い場面」…… 16
詩6篇「無題」「再びマンモス時代」「木登りをする女」「青い水たんぼ」
「無題」「驟雨直後」…… 22
詩2篇「蛙・生殖」「病氣」…… 27
詩「無題」…… 29
詩2篇「蛙・中性」「無題―未定稿―」…… 30
詩7篇「愛犬ルリパロと私の散歩」「蛙の散歩」「宵祭り」「秋」「無題」
「朗らかな夕景」「一人への詩」…… 32
1926（大正15・昭和元）年
詩4篇「無題」「秋」「蛙・晴天」「Nocturne. Moon and Frogs.」…… 39
詩3篇「蛙・一匹を慕ふ二匹の會話」「蛙つりをする子供と蛙」「失戀者と蛙の風景」… 41
詩「五匹の蛙」…… 42
詩「蛙・コーラス」…… 43
詩2篇　総題「蛙詩篇」（詩「３２ 水素のやうに熱い悲劇」、
詩「３３ 吉原の火事映る田に鳴く蛙」…… 44
詩「青蛙の夢」…… 45
詩「ギケロ」…… 46
詩2篇　総題「『私』のゐる風景詩」（詩「飛行機と鱶」、詩「傴僂」）…… 47

詩６篇　総題「蛙詩篇」（詩「蛇に食はれた蛙の亡靈」、詩「わたしも眠らう」、詩「月の出と蛙」、詩「失戀者と蛙」、詩「蛙と蛇と男」、詩「死んでゆく蟇」…… 49
詩「銅鑼の會の論爭の對手野村吉哉に送る詩」…… 51
詩２篇「女と蛙―劇の型をとつた無言詩―」「蛙・生殖３」…… 53
詩「蛙詩篇」…… 54
1927（昭和２）年
詩２篇「第百階級」「五本足の蛙」…… 55
詩「逆齒（ギャクシ）に嚙み殺さるる同胞一匹」…… 58
詩２篇（総題）「第百階級」…… 59
詩「ゲルマンへ！」…… 60
詩「淫賣婦 一十二部よりなる長詩の第一部」…… 64
詩「蛙・第八月滿月の夜の滿潮時の歡喜の歌」…… 66
詩２篇「蛙・冬眠」「地球が出來上つたあくる日の風景」…… 67
詩２篇「●」「子供に追かけられる蛙」…… 68
詩「蛙・行進曲１」…… 69
詩「●」…… 71
詩「病氣」…… 72
詩「草野虎藏と赤」…… 73
詩「嵐と蟇」…… 74
詩「蛙は地べたに生きる天國である」…… 75
詩２篇「猪狩滿直に送る手紙」「同志に」…… 77
1928（昭和３）年
詩「十八才のクロポトキン」…… 80
詩「リナに就いて」…… 81
詩２篇「蛙・行進曲」「山崎重臧に與ふる詩」…… 82
詩「蛙・殺虐の恐怖のない平凡なひと時の千組の中の一組」…… 86
詩「同志『小生』に送る手紙」…… 87
詩「或る夜のエロシエンコ」…… 89
詩「花哉」…… 90
詩「蛙２篇　●えぼがへる●ヤマカガシの腹の中から仲間に告げるゲリゲの言葉」…… 92
詩「友に」…… 95
詩２篇「鰻と蛙」「西班牙」…… 97
詩「血の話」…… 98
1929（昭和４）年
詩「無題」…… 100
詩「無題」…… 104
詩「銅鑼第十六」…… 106
詩２篇「同志に捧げる私の言葉Ⅰ」「おなじくⅡ」…… 108
詩「梁宗岱（リョンチョントイ）に送る」…… 111
詩「詩四篇　●おまへを喰ひたい 無題 恥っつあらしのやうな話
ドイツまで唸る詩を書きたい」…… 112

詩「廣東を去る直前」…… 118
詩「ドフトエフスキーに送る手紙」…… 121
詩「片」…… 124
詩3篇「廣東を去る直前」「血の話」「道德その他」…… 125
1930（昭和5）年
詩「無題」…… 130
詩「冬」…… 132
散文詩（書簡体）「返事」…… 133
詩「手紙」…… 136
詩「紙芝居の前口上」…… 138
詩「紅雲町五十六番地の一角」…… 140
詩「ある時」…… 144
1931（昭和6）年
詩「マルセイヰエズ」…… 146
詩「無題」…… 147
詩「麻野早一郎」…… 149
詩「小さい一團」…… 151
1932（昭和7）年
詩「新宿繹」…… 154
詩「女工」…… 155
散文詩「寫眞」…… 156
散文詩「手紙」…… 157
詩「失題」…… 158
1933（昭和8）年
詩2篇「訪問」「午前三時」…… 161
1934（昭和9）年
詩「久松卯之助ノ死」…… 162
詩「訪問」…… 163
詩2篇「おもんみよ」「春」…… 164
1935（昭和10）年
散文詩「その交響の大歡喜を」（原題「●」）…… 170
詩「天の饗宴」…… 172
詩「詩四篇　月見草　ドストエフスキーⅡ　日本海　ああ」…… 175
1936（昭和11）年
詩「たしかにその日のひる過ぎまでは彼等は下界に生きてゐた
——前橋紅雲町のみんなに送る——」…… 182
詩「空氣祭」…… 185
詩2篇「きちがひのかへる」「寓話」…… 186
詩「鳩」…… 190
詩「挽歌」…… 196
詩「樹木」…… 197

詩「日食」…… 199
詩「自殺流行」…… 201
詩「戀愛」「受句」…… 203
1937（昭和 12）年
詩「蛙」…… 205
詩「花」…… 207
詩「海」…… 209
散文長篇詩「聾の蛙（るりる）」…… 211
詩「二十世紀もまんなかに近く」…… 216
詩「さよなら上海」…… 217
1938（昭和 13）年
詩「石」…… 219
詩「詩人と詩人」…… 220
詩「支那點點」…… 222
詩「梟と蛙」…… 226
散文詩三篇「天」「豚の血」「京滬點景」…… 227
1939（昭和 14）年
詩「餞壮行」…… 230
詩「天」…… 231
詩「フアンタジー」…… 233
詩「相生（パクサン）よ死ぬな」…… 235
詩「タカラマカン」…… 238
詩「動（うご）かざる自然（しぜん）」…… 240
詩「鑛（イシ）石と人と」…… 242
詩「港」…… 244
散文詩「めつかちの由來とその後」…… 246
詩「蛙」…… 248
詩「Berling ― Fantasy」…… 250
1940（昭和 15）年
詩「河童と蛙」…… 252
詩「富士」…… 253
詩「荒川富士」…… 254
詩「富士山」…… 256
詩「富士幻現」…… 257
1941（昭和 16）年
詩「二千六百年を迎ふ」…… 259
詩「富士龍」…… 260
詩 9 篇「Berling-Fantasy」、「富士山」、「タクラ・マカン」、「富士山」、「富士幻視」、
「きちがひのかへる」、「寓話」、「めつかちの由来とその後」、「桃」…… 263
詩「富士山」…… 284
詩「富士山」…… 286

詩「富士山」…… 288
詩「富士山」…… 290
詩「凱旋部隊」…… 292
1942（昭和 17）年
詩「われら斷じて戰ふ」…… 298
詩「沸きあがる歌」…… 300
詩「中華民國の藍に就いてⅡ」…… 304
詩「中華民國の藍に就いて」…… 306
版画集（草野心平・説明）『上海の黄包車（わんぱつ）に關する木版画六十』
（太平書局編纂、太平書房、一二月五日）。…… 308
詩「六月二十一日の花の記錄」…… 429
詩「噫！軍神加藤建夫少將」…… 435
1943（昭和 18）年
詩「ひめひとつばの思ひ出」…… 439
詩「黑富士」…… 443
詩「故郷の入口」…… 445
詩「大東亞の新年を迎ふ」…… 453
詩「沸きあがる歌」…… 457
詩「還都三周年を記念す」…… 462
詩「道」…… 464
詩「萬感なみだ溢るゝまなこで」…… 466
1944（昭和 19）年
詩「豐滿大堰堤（ダム）」…… 468
詩「南京は五月雪ふる」…… 470
詩「ゆき」…… 471
詩 8 篇「総題 天眞爛漫の世界のなかで」／「大東亞の新年を迎ふ」
「新しい行進」「大青天」「雲仙普賢」「行々子の挽歌のなかで」「黑富士」
「中華民國の藍に就いて」「天眞爛漫の世界のなかで」…… 472

一九二三（大正一二）年～一九四四（昭和一九）年

無題

草野心平

そこらこゝらに墓のある
だんだらした廣い草丘の上を

灰黑色の水牛の群が數多
あたまを垂れて草を食んでゐる
その向ふにたそがれの太陽が光つてゐる
前の水のない田のおもてには
小さい稻の切株がかぼそく並んで
それから出た青い芽が
刀の様な晩秋の空氣に觸れてゐる

さつき、めちやくちやに光つてゐた太陽が
段々おとなしくなつて赤らんで來た
丘の背に生えてゐる雜草が
はづかしさうにくつきり見える
みんなが沈默してゐる
太陽の行動にきゝ入つてゐる

赤い夕月とまつてゐる

草野心平

今宵も彼は月の出の豫感にみぶるひしながら
ふんわり家をぬけだした

蒼色のヨーロッパの服にくるまり
なまぬるい夏の草草をふみつつ
影のやうに細々と　細々と

そして、いつもの山中の湖のほとりにたどりつくと
ぐつすり腰を下ろし
やたらにせまつてくる鬼氣の一枚一枚を
指尖でにたにたひるがへすのだ
湖はふくよかな山波の足を
もう何年か感覺不能にまどろませ
處女の肌などはすぐさま染められてしまふ
うす紫の空氣が息ぐるしいほど
水のもにのしかゝつてゐる

いまのほつたばかりの赤い夕月が
ひとりみようねんと下空に靜座し
その赤色の光りを青黒くすんだ湖面にたらしてゐる
が、月を迎ひに夏虫一匹ないてゐない

黒ラシャのソフトの下に錆びた鐵ぶちの眼鏡をふ
らつかせ

死人の肌さはりの、やうな風景である
たゞ、ひとり青服の彼のみは
鐵ぶちのかげにおだやかなきちがひの眼をすゑつ
け
曲線的な神經になやみつゝ
タンブリンもつさすらひの女の瞳
ある窓眞にあつたその綠の瞳と
ふるえるほど相似よつたある人の瞳を
草間からでもしのびでないものかと
そこらあたりでほゝ笑まないものかと
赤い夕月とゝもにまつてゐる

虫よ

黄色い斑點を染めた
黑色の小さな虫が
細い草の莖にしつかりつかまつてゐる
細い細いその莖がそんなに大事なのか
虫よ君の眼を大きな顯微鏡にうつしてくれ
だが、君の眼を見るのは恐ろしい
虫よ、その莖をそうそう下りてくれないか。

まんだらな夕景

きいろい花をつけた野生の莨が
しづかによりあつて
黑い圓味をもつた虫らが
操人形のやうに　見えない糸にあやつられて

夕陽の紫こ舍のまんだらな
もさいつくをすつぽりかぶつて
いまひここき
はげしい歡樂に汗ばみ給へ

花から花へ飛びまわつてゐる
どうしても蒼空がうす紫のらしい細い糸をたれてこび
　まわらしてゐるやうだ
黑い虫らはよつぱらいのやうに
黄色い花の匂ひをゆすぶつては
又すいこほかの花にもぐりこむ

いつからこのおだやかな慾情の夢は續けられてゐたの
　か
花たちこ虫らとの不思議な不思議な……

日は暮れようとする
君たちよ

月夜のうすものが
もうすぐ　ふるへて
かほもりこいつしよに下りてくるだらう。

草野心平

淋しい一本道

草野心平

僕が頭を病んでゐると
Fが彼の女に逢ひにゆくから
金を貸してくれと云つて來た
六十錢やつて
心細いだらうと思つて又二十錢やつた
そして僕の財布はからつぽになつた

いたみきつてる僕の神經に
ドアを閉めて出ていつた彼の女の靴音がぺたりぺたり
コンクリートの階段にひゞいて消えて行つた
僕は知つてゐる

奇い月に照らされるのだから
キツスのあとがにがい記憶になつてしまう

「戀はしやぼん玉だ」
月並な定義を下しながら
心はじり〳〵淋しくなつてくる
Fよ

それからづうつと一本道
小舟をのりすてゝ
いよいよあの街角までくると
走つてゆく俥などをきまぐれに眺めながら
都會にでて來た理由を別にこしらへて
それからすたすたあるきだすのだ
ういたり沈んだりする心に掌をあてて
砂ほこりをたてながらあるいてゆくのだ

だが歸りの小船の中では
たつたひとり泣きたい顏を

年上の友よ
月が水の上にゆらいだら
その冷たさの中に
ひやつと何かを感じてくれ
君の戀は淋しい運命をもつてゐる
陷落すべき運命をもつてゐるのだ

少さな書齊兼寢室の悲劇

草野心平

ものうい倦怠が
ランプのほやをたゝきつけた

碎けちつた硝子かけが
すこしも動かずに
くひつくやうな見幕をしてゐる

灯の消えたランプが
ぎゆうと一本足で
うるいる胸をさゝえてゐる

夜はせむしのやうにしやがんでくる

私の倦怠は歪むでしまつた

無題

食べおはつた大理石(たゐしいし)の圓卓子に
小さい錫の盃や
象牙の箸がすつかり
煙草のけむりにからまつて
古代支那女まどろんでゐる

秋の僧院

草野心平

古代の色しのびやかに
哀歡の匂ひ
甃石に墜ちし陽かげの
物淋しい暗示にゐののく
まぬがれぬもろもろの嘆き

すえかれし儚なきなげき
うら悲しくも午さがり
秋のたなごころに冷やかなる

居留地夕景情緒

淋しい匂いのする感情が
ふるいながらよりあつまつて
うす蒼い一つの街燈を泪ぐませてゐる

――詩集撥園の喇叭より――

月夜の馬

草野心平

中年の白い馬が一匹
ぼうつとした丘で草を食むでゐる
どこからともなく病氣風が吹いて
蟲の音が　消えたり
燃え上つたりする

馬は青白い食慾をみたしながら
時々空の具合を眺めてみたり
まざまざと背中を月に照され
熱い泪のたまつた眼で
秋蟲の音にきゝいつてゐる

だがすぐ飢にせまられてゐるこみに
(多分厩からにげて來たのであろう)
かつかつと草を食むのである

草野心平研究資料集

第2巻

詩

一九四六（昭和二一）年～一九七五（昭和五〇）年

クロスカルチャー出版

凡例

一、本書は『草野心平研究資料集』第1回配本（全3巻）の第2巻である。
一、本書の底本には、詩誌、雑誌、新聞などに掲載されたものを使用した。
一、復刻に際し、読者の利用の便に鑑み、適宜拡大縮小等をして収めた。
一、本書の底本は下記の通り。
　第1巻　詩　詩誌、雑誌、新聞などに掲載されたもの
　第2巻　詩　詩誌、雑誌、新聞などに掲載されたもの
　第3巻　翻訳詩、随筆、評論　詩誌、雑誌、新聞などに掲載されたもの
一、第2巻巻末に、澤　正宏氏による解題［書誌］、小論、第3巻巻末に解題［書誌］を付した。

目　　次

第2巻　詩　1946（昭和21）年～1975（昭和50）年

1946（昭和21）年
詩「竹林寺幻想」…… 498
1947（昭和22）年
詩「春のうた」…… 504
詩「梅雨」…… 506
詩「牡丹圏」…… 507
詩「落差」…… 510
詩「桂離宮竹林の夜」…… 513
詩「庭」…… 515
詩「牡丹圏」…… 517
詩4篇「ケロッケ自傳」「古虎（コウフウ）自傳」「ゲリアの演説の最後の一節」
「『谷間より』の序詩」…… 520
詩4篇「大鹽盤」「竹」「竹千本」「月」…… 523
1948（昭和23）年
詩2篇「宇宙線驟雨のなかで」「宇宙線富士」…… 529
詩「浦安にて」…… 531
詩「石の微笑」…… 532
詩2篇「記錄」「無題」…… 533
詩「春」…… 536
詩「冥」…… 537
詩「我が抒情詩」…… 539
1949（昭和24）年
詩「胃袋」…… 552
詩「富士山」…… 554
1950（昭和25）年
詩「風景」…… 555
詩「十字架」…… 556
1951（昭和26）年
詩「火の車」…… 558
詩「地球」…… 561
詩「ペリカン」…… 563
1952（昭和27）年
詩「雪」…… 564
詩「日記」…… 567
1953（昭和28）年
詩「李太白と蛙」…… 569

詩「陶晶孫を偲ぶ會での即興詩」…… 571
歌詞「うた」五篇…… 573
詩「白い蛙」…… 587
1954（昭和 29）年
詩集 草野心平 …… 593
詩「判決の日に」…… 700
詩「二十世紀の海の底から」…… 701
詩「メトロノーム」…… 708
詩「水爆エレヂー 俗歌風に」 …… 709
1955（昭和 30）年
詩「水爆エレヂー　俗歌風に」…… 710
1955（昭和 30）年
長篇詩「金華山の鹿」…… 711
1955（昭和 30）年
詩「春」…… 717
1955（昭和 30）年
詩「六月」…… 719
詩「牡丹圏」…… 720
詩「決心」…… 722
詩「富士」…… 724
詩「雨の円覺寺の椿」…… 726
詩「エレヂー あるモリアヲガエルのこと」 …… 727
詩「肺」…… 733
詩「蛙・傳令」…… 734
詩「夜の海」…… 735
詩「肺結核に関する三つの作品」…… 738
詩「地球に初めて雪のふつた日のこと」…… 741
1957（昭和 32）年
詩「『鴉のゐる麦畑』に寄せて」…… 750
詩「夜の海」…… 752
詩「黒い蛙」…… 754
1958（昭和 33）年
詩（無題）…… 756
詩「祝婚歌」…… 757
詩「北上川」…… 759
詩「哈密（ハミ）」…… 761
詩「ゴビの蛙」…… 765
詩「幽霊」…… 770
詩「Orions」…… 772
散文詩「移転通知にかへて」…… 774
1959（昭和 34）年

詩「柳 本郷隆におくる」…… 776
詩「哈密」…… 780
詩「福寿草」…… 782
詩「Aコンドルの禿の由来」…… 784
詩「Bering　Fantasy」…… 788
詩「そのリアリズムに就いて」…… 789
1960（昭和35）年
詩「マンモスの牙」…… 792
詩「福寿草」…… 793
詩「森」…… 794
詩「蛇を呑んだ蛙」…… 796
詩「おたまじゃくしたち四五匹」…… 800
1961（昭和36）年
詩「沼さんの夢は死なず」…… 803
詩「がぎむの独白」…… 804
詩「富士山」…… 806
詩「たまごたちの界隈」…… 807
詩二篇「しまったといまでも思う。」「金魚」…… 809
詩「ギャランスの空気のなかで」…… 813
詩「空気天」…… 815
詩「号外」…… 816
詩2篇　総題「蛙」（童詩）「五ひきのかえる」「お天気」…… 817
詩「おたまじやくしたち四五匹」…… 822
散文詩「長命大觀音」…… 823
詩「パセリー考 現代風俗詩抄より」…… 825
詩「満月の夜の会話」…… 827
詩2篇「富士火山」「冬眠」 …… 830
散文詩「長命大觀音」…… 832
1963（昭和38）年
詩「十三という町」…… 833
詩「年輪」…… 835
詩「死」…… 838
詩「太陽を呑む」…… 842
詩「死」…… 847
1964（昭和39）年
詩「南秋津」…… 848
詩「凧」…… 853
詩「ばっぷくどん」…… 855
詩「凧」…… 856
詩「大王龍」…… 857
1965（昭和40）年

詩「象と富士」…… 861
詩「雲雀と富士」…… 863
詩「青銅の富士」…… 865
詩「地中海の雀」…… 866
1966（昭和 41）年
詩「デンシンバシラのうた」…… 868
詩「冬至」…… 870
詩「オーボエの雲 十二才の小林明子さんにおくる」…… 871
詩「施餓鬼」…… 872
詩「蛙の花」…… 873
1967（昭和 42）年
詩「炎天の死」…… 875
詩「デンシンバシラのうた」…… 878
詩 3 篇「ダイヤモンド幻想」「歴程の歌」
「Hachijoh rhapsody dadadan dadadan dadadan dadadan」…… 880
詩「富士よ裂けろ」…… 885
詩「不可解な朝」…… 890
詩「天」…… 892
詩「ダイヤモンド幻想」…… 893
1968（昭和 43）年
詩「スケッチ」…… 894
詩「或る死の報告」…… 895
詩「たちあがれ」…… 899
散文詩「紙の白衣」…… 901
詩「黒富士のこと」…… 902
詩「一本の道」…… 904
詩「或る死の報告」…… 905
1969（昭和 44）年
詩「夏眠」…… 907
詩「Volga——タシケント・モスクワ間の機上にて——」…… 908
詩「武蔵野赤十字病院第三病棟五階第八号室」…… 911
詩「歴程の仲間」…… 912
詩「桃の日の桃の花」…… 914
1970（昭和 45）年
詩「凡平自伝」…… 915
詩 4 篇「サリム自伝——蛙・作品第一二一番」「地球は生きている」
「ホノルルの満月」「六十六のクリスマス」…… 916
詩「to Murano Shiroh」…… 919
詩「デンシンバシラのうた」…… 921
1971（昭和 46）年
詩 3 篇「天元 S・G氏に」、「紅梅」、散文詩「ノートルダム寺院で」…… 922

詩「某日某日」…… 926
詩3篇「蛙 作品第一二二番」、「コザ」、散文詩「香港島」 …… 929
詩「母岩」…… 931
詩「その墓は 蛙作品第一二三番」…… 932
詩「生と死の」…… 933
詩4篇「ウルムチの満月」「駱駝」「天の居酒屋で」、英詩「Awake」…… 934
散文詩「ボンベイ」…… 938
詩2篇「誕生日」「原始林にダンプを入れる」 …… 940
詩「古い寓話――童詩風の――」…… 943
詩「炯炯鬱勃――歴程賞受賞と詩集『春鶯囀』の近刊を祝して――」…… 944
詩「チチカカの深い湖底を」…… 945
詩「幻の孔雀」…… 947
詩「死をめぐる某日某日」…… 949
詩「免状」…… 951
詩「或る永遠」…… 952
詩2篇「凱旋部隊」「柏生(バクサン)よ死ぬな」…… 954
詩「幻の氷の原で」…… 957
詩「いま沈む宇宙のボス」…… 959
詩「免状」…… 960
1973（昭和48）年
詩「白い駄ン馬など眺めるのだ」…… 961
詩「なにがクリスマスだ」…… 963
詩「書に就いて」…… 964
詩2篇「龍の光」、散文詩「埋葬」 …… 966
詩2篇「ガンガの太陽」、「或る開墾者の新婚日記」…… 968
詩「キシミみなゆるみて夜の土うごく」…… 973
詩「まともな変態」…… 975
詩2篇「仮想招宴」「或る日キリムは次のような独り言をつぶやいた」 …… 976
詩「ベトナム」…… 984
詩「幻の富士」…… 985
1974（昭和49）年
詩「字を書くことに就いての自戒」…… 986
詩2篇「自分の旅」「背景は」 …… 987
散文詩「死臭」…… 990
詩「海」…… 992
詩「異常」…… 993
詩「息づく色色」…… 996
詩2篇「私は死んだ」「鎌を研ぐ」…… 998
詩「汎神論に雪がふる」…… 1001
詩「鎌を研ぐ」…… 1004
詩「ウバシニヤッド」…… 1005

詩「それから俺はシャベリだした」…… 1006
詩「死に就いての誤解」…… 1007
詩「息づく色色」…… 1009
1975（昭和 50）年
詩「正月のためのエスキース」…… 1011
詩 3 篇「幻の洞窟」「秋篠寺」「新聞」…… 1012
詩「蛙連邦行進曲―ラ マルセイエーズの曲を借りて―」…… 1017
詩「畑での仕事」…… 1018
詩「海上富士」…… 1021
詩「火葬」（追悼詩）…… 1022
詩 3 篇「雲上富士」「富士」「ガラスの月」…… 1024
詩「スンガリーを滑る」…… 1025
詩「宇宙天」…… 1026
「弔詞」…… 1027
詩 8 篇「八岐大蛇（戯詩）」「ひぐらし」「全天」「魚だって人間なんだ」
「頭蓋骨」「月」「医道に就いてびんるは語る」「畑のへりで」…… 1028
詩 4 篇「指紋」「満月龍」「若い溶岩流」「サマーラの塔」…… 1038
詩「Golden arrow-poison frog」…… 1042
詩「筆書き―佐久間孟を悼む―」…… 1043
詩「畑での仕事」…… 1045
小論　澤　正宏「表現者としてのアナキスト―草野心平とモダニズム詩 /
プロレタリア詩」…… 1047
解題　［書誌］初出資料（詩誌、雑誌、新聞など）一覧
―1923（大正 12）年～ 1975（昭和 50）年―　…… 1061

一九四六（昭和二一）年～一九七五（昭和五〇）年

竹林寺幻想

草野心平

序。

昭和十九年かの秋の一日。海口守三夫妻とともに鎭江に遊んで甘露寺を觀た。眼下長江の景觀はよかつたけれどもさしたる感興を覺えなかつた。更に車を遠く竹林寺に走らすることになつたが自分は用務のため南京にかへり遂ひにこの憧憬の地を訪れること出來ずにしまつた。以來同寺界隈が腦裡を去來すること度々である。現實の同寺竹林を知らない自分は勝手に自分なりの幻想をここにちぎつて叙する次第。飽くまでも自分内部の景色に過ぎない。

春

菜の花畠の絨緞の向うに。

無木巖石の丘があります。
その麓の夕暮の。
縞靄の流れてゐるあたり。
楚々蕭々としたこんもりが竹林寺です。
優に何千何萬の眞竹孟宗の類ひがあります。

ほのぐらい畠中道を獨りで歩いてゆくのはたしかにわたくしであるけれども。いくぶん香りにあてられて。またわたくしでないやうな氣もします。花の明るい色のため却つてあたりは暗く見え。やうやくなれてきた眼路に。遙か向うの竹林が大熊の背中のやうにまるまつてゐます。

ああ羅の月。

無木巖石の丘の麓。
あはい月光をうけてゐるあのこんもりがさうなのです。

わたくしの肩には野鳩の亞子がもうねむり。
その翅はわたくしの耳の根元に觸れてゐます。

夏

ざんざんざんの土砂降りに。
波うつ竹林の大たぶさ。
稻妻天を斜めにさけば。
伽藍を圍む全竹林はレントゲン。
むらさきの凄氣濛濛たちのぼる。

やがて雷雨が南に去れば。
青竹のあひまをぬつて大螢が。
鬼火のやうに亂れとびかふ。

葉つぱにとまれば水サファイア。
幹にとまれば光りの青い血がながれる。
墓の聲聲。
夜は更けわたる。

秋

卷雲が天に無數の釣糸を流してゐるやうな晴れた日には。
麓にちかい白壁の村から女乞食があがつてくる。
本寺の側の笹葉の積つた石の段段のつきたところに亭がある。
寂莫として。
おとなふものもまるでなく渡りもここには降りてこない。
乞食は亭で陽を浴びてはまどろみ眼醒めては虱などをつぶしたりする。

そよ風が吹けばさやさやさや。
そよ風が引けばさやさやさや。
飛白模様が蔓にちらつき。
何千本のさやさやさや。
本寺の庭の木犀の香がうづいてくる。

冬

ばさりと墜ちた雪をかぶつて。
羽搏く雉の。
まぶしい虹。
※
おまへは何んだ。

おまへこそ鰒蛇だ。

※

午前四時。

木魚にのつて讀經がきこえる。

厨房には既に。

豆腐と味噌と鹹菜(なつはづけ)と。

湯氣にかすむ僧衣のわきを。

蝕が過ぎた。

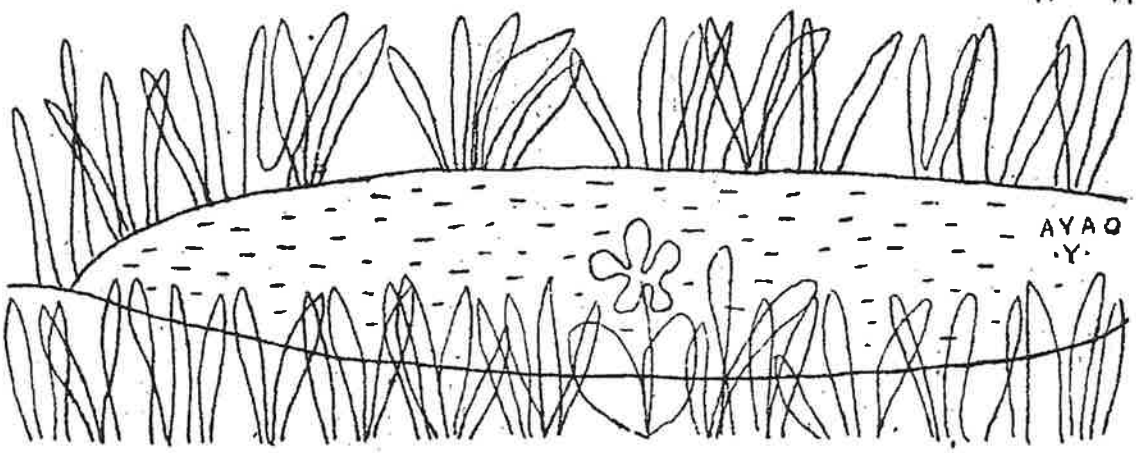
附記。われわれの乘つた中國からの復員船から天然痘が發生して博多沖に投錨したまま既に十日を經過してゐる。蠟燭をともさなければ晝間でも字もよめないざわめきの臭い船艙の底でこれをものす。昭和二十一年三月二十八日。

春のうた

草野心平

かえるは多のあいだは土のなかにいて春になると
地上にでてきます。そのはじめての日のうた。

ほっ　まぶしいな。
ほっ　うれしいな。
みずはつるつる。
かぜはそよそよ。



草野心平研究資料集

第3巻

翻訳詩・評論・詩論・随筆・書評・選評・編集後記・覚書・報告文など

一九二五（大正一四）年～一九七五（昭和五〇）年

クロスカルチャー出版

凡例

一、本書は『草野心平研究資料集』第1回配本（全3巻）の第3巻である。
一、本書の底本には、詩誌、雑誌、新聞などに掲載されたものを使用した。
一、復刻に際し、読者の利用の便に鑑み、適宜拡大縮小等をして収めた。
一、本書の底本は下記の通り。
　第1巻　詩　詩誌、雑誌、新聞などに掲載されたもの
　第2巻　詩　詩誌、雑誌、新聞などに掲載されたもの
　第3巻　翻訳詩、随筆、評論　詩誌、雑誌、新聞などに掲載されたもの
一、第2巻巻末に、澤　正宏氏による解題［書誌］、小論、第3巻巻末に解題［書誌］を付した。

目　　次

第3巻　翻訳詩　評論　詩論　随筆　書評　選評　編集後記　覚書　報告文など
1925（大正14）年～1975（昭和50）年

〔翻訳詩〕
1928（昭和3）年
翻訳詩「坑夫の歌」W・H・ユトレイ…… 2
翻訳詩「塀」カール・サンドバアグ…… 4
翻訳詩「シカゴ」カール・サンドバアグ…… 5
翻訳詩「嘘ツキ」カール・サンドバーグ…… 6
翻訳詩（散文詩）「歩く者」アルチユロ・ヂオヴアニツチ …… 8
1929（昭和4）年
翻訳詩（散文詩）「子供の口から」アルティウロ・ヂオヴニッティ …… 13
1930（昭和5）年
翻訳詩2篇「一時的平等」ロオズ・ザグノニ・マリノニ、「葬式」ジヨセフ・カアラー …… 16
1931（昭和6）年
翻訳詩9篇　「同志に送る」アルチユウロ・ヂオヴアニツチ、「歩く者」同前、「丘」スプンリバア、「サツコとヴアンゼツチ」イスラエル・カスヴアン、「創造に従事する人間の海」同前、「シカゴ」カアル・サンドバアグ、「嘘ツキ」同前、「ダイナマイト所持者」同前、「塀」同前、翻訳詩2篇「イーストサイドの夜明け」ポーター・ミロン・チヤッフキー、「ミシシッピの農夫」チヤーレス・ヘンリ・フォード…… 17
翻訳詩「塀」カアル・サンドバアグ…… 57
1932（昭和7）年
翻訳詩（散文詩）「歩く者」アルツウロ・ヂオヴニッチ …… 58
〔評論、詩論、随筆、書評、選評、編輯後記、覚書、報告文など〕
1925（大正14）年
随筆「後記」…… 63
評論「福田正夫の沒落」／編輯後記「寸言」…… 64
随筆「後記」…… 67
1926（大正15、昭和元）年
随筆「後記」…… 68
書評「『色ガラスの街』に就いて—随筆的デツサン批評—」…… 69
評論「散彈的月評」…… 72
1927（昭和2）年
評論「雑誌批評」…… 76
評論「散彈的月評」／随筆「相互破壞」…… 77
随筆「二月六日」…… 86
随筆「農民文學雜考」…… 90
随筆「時日の問題」…… 93

評論「詩集『たんぽぽ』と坂本遼」…… 94
随筆「亞の回想」…… 98
1928（昭和 3）年
随筆「第百階級斷想」…… 99
論文（翻訳）「子供の天眞性に就いて—『現代學校の起源と理想』第十五章—」
フランシスコ・フエラア…… 101
随筆「詩に關する斷片の速記」…… 105
1929（昭和 4）年
随筆「カール・サンドバアグ　人及びその作品に就いて」…… 107
随筆 3 篇「反對一件」「アルッゥロ・ヂオヴアニッチ Arturo Giovanitti」
「エドガー・リイ・マスターズ Edger Lee Masters」…… 116
随筆「譯に就いての返答」…… 121
随筆「ささやかな彈片」…… 123
随筆「君も僕も退屈しないか」…… 127
随筆「アメリカ詩壇の現狀」…… 130
随筆「『特權』と『不可避』に就いて 春山行夫君に答ふ」…… 135
評論「尾形龜之助」…… 138
アンケート「◆」…… 141
1930（昭和 5）年
アンケートへの回答「昭和五年度日本詩野（ママ）へ」…… 142
詩論「詩の技術に就いての斷片的ノート少々」…… 143
詩論「詩の技術に就いての斷片的ノオト少々（二）」
随筆「平凡な話」…… 147
随筆「北海道釧路の產」…… 149
評論 2 篇「アメリカプロレタリヤ詩寸感」「尾形龜之助」…… 151
詩論「プロレタリア詩の分野とその技術に就いてのノート」…… 158
随筆「ひつくるめ一束」…… 162
随筆「千家元麿氏への公開狀」…… 163
1931（昭和 6）年
覚書「ヂオヴアニッチに就いての覺え書」／随筆「思ひ出」…… 167
随筆「『詩の分野と技術』への反駁への回答」…… 177
アンケートへの回答…… 180
評論「カール・サンドバアグ 人及びその作品に就いて」…… 181
評論「宮澤賢治論 ★一読者のノート」／アンケートへの回答 …… 190
随筆「銅鑼」…… 202
随筆「癌藏の話」…… 209
1934（昭和 9）年
随筆「方寸の寫眞 詩集瑞枝の出版に因んで著者との思ひ出を記す。」…… 214
随筆「詩の第一人称に就ての感想」…… 217
随筆「秋の通信を讀む」…… 219
随筆「『半谷悌三郎』の思ひ出」…… 228

評論「三野混沌論」…… 230
1935（昭和 10）年
評論「宮澤賢治の詩の方法」…… 237
随筆「★」…… 240
随筆「村山槐多 その他」…… 241
1936（昭和 11）年
評論「諷刺詩への陥穽」…… 247
随筆「詩人と生活」…… 250
随筆「謹賀新年」…… 254
1937（昭和 12）年
評論「村山槐多論」…… 255
随筆「山村暮鳥の詩の改竄に關して藤森成吉氏に與ふ」…… 275
1938（昭和 13）年
随筆「宮澤賢治の詩碑」…… 281
随筆「新しい動向」…… 284
随筆「五度目の上海」…… 286
随筆「梁宗岱の思ひ出」…… 290
1939（昭和 14）年
随筆「やきとり」…… 292
随筆「立原道造追悼」…… 294
随筆「宮澤賢治の一つの面」…… 297
随筆「『學校』時代」…… 299
随筆「永い話」…… 302
1940（昭和 15）年
随筆「雑一束」…… 304
随筆「一寸」…… 305
随筆「月評を求む」…… 306
1942（昭和 17）年
随筆「重慶の同窓へ」…… 309
随筆「重慶にゐる同窓諸君に告ぐ」…… 313
随筆「南京通信」…… 319
1943（昭和 18）年
報告文「中日文化協会第二回全国大会」…… 324
随筆「大東亞國民大會の感壊」…… 327
1947（昭和 22）年
随筆「雑雑の俎（Ⅰ）」…… 329
選評「戦後感」…… 332
編輯記 2 編「編輯前記」「後記」 …… 333
評論「八木重吉―人と作品に就いて―」…… 334
随筆「雑雑の俎 3 彼は詩人だつた 尾形亀之助のこと」 …… 341
1948（昭和 23）年

随筆「寸感」…… 345
随筆「山村暮鳥の印象」…… 347
1949（昭和 24）年
随筆「三つの勧進帳」…… 352
1950（昭和 25）年
評論 2 篇「個性と表現」「私の詩作について」 …… 354
随筆「安井東京都長官におくる―泥試合中止―」…… 365
随筆「覺え書」…… 368
評論「詩の鑑賞Ⅱ」…… 370
随筆「覺え書」…… 404
1951（昭和 26）年
アンケートへの回答「執筆者通信」…… 405
随筆「讀書だより」…… 406
1952（昭和 27）年
随筆「作者の感壊―編輯氏及び執筆諸氏の手紙―」…… 407
1953（昭和 28）年
随筆「日常生活の美」…… 409
1954（昭和 29）年
随筆「死んだ四人」…… 413
1955（昭和 30）年
随筆「山靴」…… 416
随筆「完結に際して」…… 417
1956（昭和 31）年
書評「伝統と雪への執心」…… 418
随筆「高村光太郎の人間像」…… 419
1957（昭和 32）年
随筆「スダンのひと〈写真と文〉」…… 425
随筆「立原道造追悼」…… 426
自作解説「白い蛙」…… 428
書評「吉川幸次郎著　人間詩話」…… 431
書評「大竹新助著 写真・文学散歩」…… 432
1958（昭和 33）年
書評「『鹹湖』について …… 433
随筆「アジアへの留学生」…… 434
1959（昭和 34）年
随筆「一つの系譜 9 銅鑼・学校・歴程の回想」…… 436
随筆「一つの系譜 10 銅鑼・学校・歴程の回想」 …… 441
随筆「一つの系譜 11 銅鑼・学校・歴程の回想」 …… 445
随筆「編集室ノート」…… 450
随筆「編集室ノート」…… 451
随筆「人に見せる日記」…… 452

1960（昭和 35）年
随筆「編集室ノート」…… 453
随筆「葦平の思い出」…… 454
書評「世界名詩集大成 18 巻 東洋篇 初めての集大成 天をひきさく稲妻の光芒」…… 456
1961（昭和 36）年
随筆「『銅鑼』と『学校』」…… 457
1962（昭和 37）年
随筆「松永延造の『夢を喰ふ人』」…… 460
1964（昭和 39）年
随筆「寸感」…… 462
1965（昭和 40）年
随筆「貘のこと」…… 464
随筆「銅駝の怪物たち」…… 466
評論「宮沢賢治の詩――その二つの極の考え方――」…… 470
1967（昭和 42）年
随筆「私のアルバムから」…… 482
随筆「長安一片月」…… 490
詩論「小さな三つの例」…… 492
1969（昭和 44）年
評論「解説」…… 500
1970（昭和 45）年
随筆「三野混沌の葬儀に列す」…… 514
1971（昭和 46）年
随筆「怪物武田泰淳」…… 518
1973（昭和 48）年
随筆「不思議な傑作『夢を喰ふ人』と松永延造」…… 521
1974（昭和 49）年
随筆「山本太郎との出合い」…… 526
1975（昭和 50）年
随筆「村野四郎の『芸術』」…… 528
随筆「不思議な妄想」…… 529
〔座談会、合評〕
1927（昭和 2）年
「合評」…… 531
1935（昭和 10）年
「詩人座談會」…… 534
「詩人座談會」…… 548
1936（昭和 11）年
「諷刺詩に關する座談會」…… 563
1948（昭和 23）年
「現代詩の核心をめぐつて（座談會）」…… 570

1958（昭和 33）年
「座談会 詩と小説について」…… 592
1960（昭和 35）年
「座談会 第二現代詩の時代」…… 615
1963（昭和 38）年
「座談会 惣之助について」…… 635
1967（昭和 42）年
「座談会 唐代の詩人たち」…… 650
解題 ［書誌］初出資料（詩誌、雑誌、新聞など）一覧
―1925（大正 14）年～ 1975（昭和 50）年― …… 663

一九二五（大正一四）年〜一九七五（昭和五〇）年

〔翻訳詩〕

坑夫の歌

搖めく光の近くで
暗闇の鑛坑の中で俺達は掘る
長ーい暗がりの陰氣な坑道の中で
塵と汚物にまみれて俺達は掘る
地上には坑主の馬車と妻君
高慢ちきな「あいつ」がぶらついてゐる
あいつは俺達の金を使ふ
俺達の力はあいつに賣られる——
　不義と不正をこほして彼奴に
　不義と不正をこほして彼奴に

俺達は苦しみ働き勞れ果てる
俺達のむき出しの腕には水が滴りジムジム流れる
地上に巣喰ふ呪ひを救ふために
俺達のいのちが無になるまで俺達は疲れ働く
高い大圓の空には雲雀の樂しい囀りがあるのに
俺達の子供は苦しみ泣きさけぶ

金持ちどもがこつてゆくからだ
俺達坑夫のこつたものみんな
　眞つ暗い深い坑道の中で
　眞つ暗い深い坑道の中で

俺達は砍り俺達は打つ
一つ一つの鶴つ嘴は火爐と竈の燃料なのだ
速やかに鐵がつくられ地球の向ふ側まで走るやうに
俺達は打つ俺達は砍る
土の中で堀る苦しみにある兄弟同志
又は工場の咆りの中の兄弟同志
俺達は年中苦しみに縛られてゐる
　金持ちは金にむかつて叫んでゐるのに
　金持ちは金にむかつて叫んでゐるのに

だが俺達は生きる　俺達は愛する
そして俺達の暴君共は知るであらう
俺達は感情と力の男であると
俺達は生きる　俺達は愛する
そして俺達の荒くれた心は待つてゐるのだ
俺達の夜が明ける夜明け方を

俺達は最早や苦痛の下敷きにはならないだらう
俺達が子供や妻と歡喜の生活を生きる時がきたら

誰でもつくつたものは誰れでも護つていいといふ時がきたら
　堅坑の中で、工場の中で、田圃の中で
　堅坑の中で、工場の中で、田圃の中で

W・H・ユトレイ
草野心平譯

塀

湖畔にある石造りの家は出來あがつた
仕事士は塀をはじめてゐる
這入り込む者は誰彼となく刺し殺すやうに
棚は鋼鐵のトゲをもつた鐵棒でできてゐる
塀としてそいつは傑作だ　野次馬やゴロツキや空つ腹や遊び
　場を見つけてゐる餓鬼つ子を遮斷するだらう
鐵ん棒を透して、鋼鐵のトゲを越えて
這入るものはなんにもない
這入るものは死と雨と明日だ

カール・サンドバアグ
草野心平　譯

シカゴ

世界の豚殺し
機具製作者　小麥の山
鐵道賭博　全國の貨物のハンドル
嵐の　シャガレ聲の　ガンガン聲の
二つの肩のどでつかい都會
彼等はお前の不行狀を俺に告げるそして俺は彼等を信ずる
俺はお前のガスランプの下の化粧した女共が若い百姓たちを
　コイコイとやつてゐるのを見た
そして彼等はお前をやくざ者として俺に告げる俺は答へる
　そうだ　それはホントだ　俺は人を殺してまた自由に殺し
　にゆける人殺しを見た
そして彼等はお前をケダモノとして俺に告げる答へはこうだ
　女達や子供の顏に俺は不法なる飢餓のしるしを見た
答へ終つて俺はもう一度この　俺の都會を侮蔑する彼等に顏
　をむける　俺は彼等に侮蔑を返してそして言ふ
來い　頭を上げて生きる傲然を唱つてゐる都市を見せろ　無
　骨な強固な怜悧な都市を見せろ
事業の堆積の苦役に磁鐵性の呪ひをなげつけ青二歳の街々に
　對して　此處に女高い嚴固な強打者がつつ立つてゐる
喧嘩ばぢめようとして舌を舐めずつてる犬のやうに殘忍に
　曠野に逆らつた野蠻人のやうに狡猾に
　帽子なしで
　堀つくり返し
　雜破し
　計畫し
　建築しブチ壞し建築し
　煤煙の下で　埃いつぱいの口で　白い齒をむき出して笑つて
　　ゐる
運命の恐ろしい重荷の下で青年が笑ふやうに笑つてゐる
敗けた事のない愚劣な喧嘩屋のやうにさへ笑つてゐる
腕の中には脈搏があり肋骨の下には人間共の心臟のあるのを
　自慢してゐ　笑つてゐる
笑つてゐる！
豚殺しで　道具屋で　小麥の山で　鐵道の賭博者で　全國へ
の貨物の集散者であるを自慢する。汗ばんだ半裸體の青年の
。嵐のやうなシャガレ聲の笑ひを笑ひ笑つてゐる

カール　サンドバアグ
草野心平譯

嘘ツキ

嘘ツキは立派な着物で歩く
嘘ツキは襤褸にくるまつて歩く
着物の有る無しに係らず嘘ツキは嘘ツキである
嘘ツキは嘘ツキである　自己の言ふ嘘の中に生きる　嘘の中
　に死ぬる
そして石屋は嘘ツキの墓で嘘で生計を得るのである

嘘ツキは眼を凝視める
女に嘘ヅク
男に仲間に子供に馬鹿に嘘ヅク
そしてそいつは古い嘘ツキだ　おれだちはずつと昔そいつを
　知つてゐる

嘘ツキは國家に嘘ヅク
嘘ツキは人民に嘘ヅク
嘘ツキは人民の血を取る
笑ひと嘘でその血を飲む
　顎の笑ひ

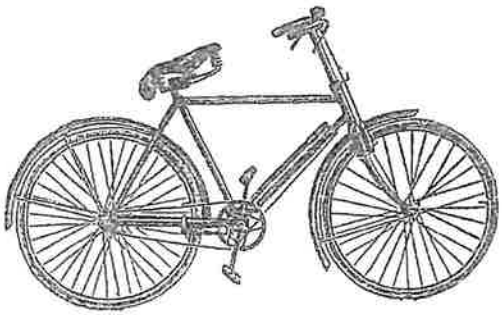
口の嘘
そしてこいつは古い嘘ツキだ　おれだちはずつと昔そいつを
　知つてゐる
其奴(ソイツ)は犬の後脚のやうに眞直ぐ
其奴はコロッブ抜きのやうに眞直ぐ
其奴は夜更けの黑猫の足裏のやうに白い

人間の舌は國家に嘘ヅク嘘ツキの上に、人民に嘘ヅク嘘ツキ
　の上にひつついてゐるのだ
人間の舌はそいつらにひつついてゐるのだ
そして終る●●どいつもこいつも地獄へ
　　どいつもこいつも地獄へ

それは鋲締めのハンマーのやうに堅い歌である
屑を出す殼(コシヤ)の眠りのやうに堅い
虱だらけの生パン作りの眠りのやうに堅い
砲彈に魂(たまげ)下た白痴のベラ言のやうにからまつてゐる

嘘ツキが閉つてゐ門のところで會つた
そいつらは言つた〃サア戰爭だ〃
嘘ツキ共はそれをきめて彼等に行けと言つた

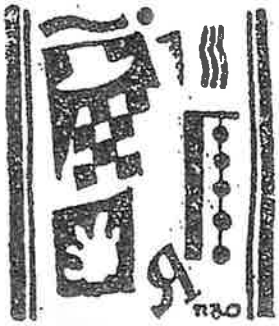
テーブルを圍んで彼等はそれをきめた
群集から遠く離れた扉の後ろで
そして鐵砲は百萬人に打ちあたる仕事をした
鐵砲は地圖の上から七百萬を吹つとばした
鐵砲は七百萬を西に送つた
七百萬は野菊達を推しつぶした
テーブルを圍んで彼等はそれをきめた
　國民に嘘ヅク嘘ツキ共



そして　どうだ
豚殺しの外に
がい骨のアゴが戰爭幽靈のたわ言をいふ
骨畑の屑は蛆虫共がきれいにした
これを外にして彼等はいま言張る
吾等は吾等の巣にかへらう！
吾等は　吾等はもう一度世界を走り廻らう
そこでは扉が閉り嘘ツキは言ふ、待ち給へ、吾等は支拂ひを
　する
扉をひらいてそしておれだちに告げる　戰爭！
　再びお前達の戰ひに行け

そこではおれは人民の語り合ひをきく
今日と明日を見ろ
嘘ツキ共がいまだと言ふ時、百萬人を首ばねる時計を据ひ付
　けろ
お前達自身の手にものをもて
　彼等と共に地獄へ行け
國家に嘘ヅク嘘ツキ共
人民に嘘ヅク嘘ツキ共

（カール・サンドバーグ　草野心平　譯）



歩く者

アルチユロ・チオヴァニッチ
草野心平譯

おれは夜つぴておれの頭の上の足音をきく。
足音は來ては行く。また來ては行く。夜つぴて。
足音は四歩で永劫にブツかる。足音は四歩でまた永劫にブツかる。行きと歸りの間には沈默と夜と無窮がある。
無窮とは監房の九尺のことである。無限とは鎖づけられおし込められないことを考へながら黄色い錆瓦の壁と赤い鐵の扉との間を歩いてゐる彼奴の行進のことである。しかもそれは決まつて最後を追ふ荒漠の巡禮者のやうに太陽の輝く世界にさ迷つてゐる。

＊＊＊

休めない夜を夜つぴておれはおれの頭の上の足音をきく。誰が歩いてゐるのか、おれは知らない。それは監獄の幽靈だ眠らない頭だ。男、あの男、歩く奴。

一、二、三、四、四歩そして壁。
一、二、三、四、四歩そして鐵扉。
彼は間隔を計つた。彼はそれを首切りが縄を計るやうに、墓堀りが棺桶を計るやうに、正確に、綿密に、用心して計つた。——四歩の各々が何尺何寸でそのまた何寸の何分にあたるかを。
一、二、三、四。足音はおれの頭に重たく堀り下げてくる。黄色い壁と赤い鐵の扉との間のその無限の歩みの中で、時には恐らく四歩でなく五歩があるだらうと不安と恐怖とでおれが數えてゐると、一足ごとの反響がおれの頭の中に凹んでくる。
だが彼はそんなに正確に綿密に用心して計つたのだから、のろい迷夢の行進の嚴肅なリズムをブチこわせるものはゐない。

第百階級斷想

草野心平

●

南アメリカにゐるといふ角の生えた蛙の寫眞を見たとき自分は少し寂しい氣がした。蛙は普通道ばたにゐるやうな平凡な蛙であつて欲しいと思つた。

鐵砲をもつてゐる兵隊、只それより幾分かきしなのは人間に對する人間の鐵砲のやうに、蛙に對する蛙の角ではないことである。

●●

夜は蛙が鳴き初めた。蛙の鳴き聲はたまらない感情のはけ口をやわらかい思ひ出にむけてしまふ。二十二日附の烏山の友がこんなことを書いてよこした。

もう鳴き出したのかなあと思つた。そして京都の何んとかいふ學者は三月十八日に鳴きだすのが通例だといつた事を想ひ出した。フアブルに言はせればそんなことは大した事でもないし、僕にも大した事ではない。

僕も蛙の鳴き聲をきいて心が和ぐことがある。が和らがない時が多い。僕が蛙に執着を感じたのはむしろそのせいだと思ふ。あの一聞平靜なコーラスから私は雜多なサク烈したもの、はげしいもの、だれもかれも同んなじであるを意識する「群集の明朗」を感じる。

●●●

ワイルドによれば、キリストは世界で最も偉大な個人主義者であつた。キリストは他の誰よりも彼自身を愛した。彼自身を愛することそれ自體が他人を愛することであつた。眞理がある、そしてそれはそれでいい。

僕が言ひたいのは「愛」がなければならない社會の不遇のことである。彼の時代の社會惡はどうしても愛を要求しなければならなかつた。そしてキリストは吸收された。人間の歴史に曾つて「愛」のなかつた時代があるだらうか。これは喜ぶべき現象だらうか。

●●●

蛙の世界には愛はない。

彼等はお早う、今日は、歌はふ、やらう、ん、やらう——
それ以上の根本的なものをもたない。
愛の忘れられた（愛の）生活、
彼等の仲間同志にダアウヰニズムを適用しなければならないなら彼等はみづから彼等の舌を嚙みきるだらう。

●●●●●

マンモスよ
再びこの地上に表はれるな
そんな法律を作つたとて何んにもならないし、吾々人間は蛙を食つていけないといふ事もだれも言はない。それで結構である。
ただ蛙たちが言ひないのは、吾々は吾々を食はないからそして食はないことは食ふことよりいいと思ふから、
人間よ人間を食ふな
そして吾々人間は「食つてゐない」といふ程、虚偽とは眞實の同義語（シニヨム）である？　と思つてゐる。

●●●●●●

アンドレエフや正宗白鳥如きは何んにも知らない鼻つたれ小僧だ。
人間に曾つてニヒリストがゐたか。
蛙たちの顏面を見るがいい。
傍若無人の彼等の横行を見るがいい。

●●●●●●●●

間違つてもらつては非常に困ることになる。
蛙達自身の世界に於ける個々の蛙は決して寸分もニヒリストではない。僕は曾つてこんなことを書いたことを記憶する
蛙はでつかい自然の讃嘆者である
蛙はドブ臭いプロレタリヤトである
蛙は明朗性な無政府主義者
地べたに生きる天國である

●●●●●●●●

下町の裏長屋町の駄菓屋のその店さきに指をくわへて立つてゐる女つ子——ある時に見える蛙は正しくそれであり、或る場合の蛙は尨大にしてつかみ得ない雲霧の象徴である。

●●●●●●●●●●

みつけたり蛙に臍のなきことを
昔の或る俳人がそう言つた
島崎藤村のいろは歌留多は言ふ
臍も身の内
人には顏だけがあることに對して藤村は臍に同情した。陶山篤太郎は背中の同情家である。
見つけたり人様に臍のあることを
蛙の腹を臍のない事に於て却つて彼等の性格を躍如たらしめてゐる。
「附記——この断想は機會ある度に續けてゆきたいと思ふ。」

私の詩作について

草野心平

或る日、それは二十年も前の午下りだつたが、私は早稲田鶴巻町を歩いてゐた。その時私の眼には星のある秋の夜の田ん圃が映つてゐた。低い屋並や人々が夜の田ん圃に黒くぬりつぶされ、そのなかから蛙の會話がきこえてきた。それがだんだん私の内部にはいり、私の中で話しあつてるそのままを記憶して、そいつをどつかの喫茶店で寫しとつた。一字の訂正もなかつたことを憶えてゐる。

「創元」に出た「わが抒情詩」は百十五行ばかりの、私としては珍しい長詩だが、こいつの大部分は池袋有樂町間の省電の中で、立つたまんま鉛筆でなぐり書きしたものである。これも殆んど訂正なしの、あつても數字か一行位で、骨子の加除は全然ない。詩集「牡丹園」にある「汽車」は闇屋列車のむんむんするなかで矢立の筆で書いたもの、これも長いがあとで手を入れるやうなことはなかつた。詩集「蛙」のなかの英語の詩はずつと以前東中野の喫茶店で、これもまるつきりの書きつぱなしで詩集に入れた。そのやうな狀態で書かれた作品が十數篇位は、三十年の詩生活のなかにはありさうな氣がする。

けれども矢張りこんなのは稀な場合で例へば「行行子の挽歌のなかで」などは「日本沙漠」に收錄するまで九年間、二十回以上の推敲をしてゐる。このやうな難產の詩も相當ある。

また Blue symphony と標題も出來てる一篇は二十四五の時に生

れたイメエヂが未だにそのままのヴィヴィドさで眼に映るがどうもまだ手のつけやうがないままになつてゐる。或ひは出來ずに終るかもしれない。「音のない風景」といふのは考へてから十數年後に、これは案外すらすらと出來た。そんな場合もある。

インスピレーションで詩をつくるといふやうなことは曾てないのだから、私は私なりの方法によつて詩を作るのだらうが、そのことを現實的に、また分析的に考へてみたことは一度もなかつた。

與へられた標題によつて、だから私ははじめて自分の作詩の經驗を、その方法面に於てみるといふ機會にぶつつかつたわけだが、かうした機會がなければ私は自分の一生を通じて自分の詩の方法を顧みるといふことはなかつたかもしれない。

で、考へてみた。みたが朦朧として分らないのである。これが本音だ。

けれども新聞記者をしたり燒鳥屋をしたりしながらも、兎も角三十年程詩を書きつづけてきたのだから書きたい意欲はあつたにちがひないし、これからもどうも無くなりさうもない。

それではどうしてさういふ意欲が湧き出るのか、どういふ詩を書かうとするのか。このことが私にとつては實際の作詩よりも重大である。然しながらここではそれには觸れたくない。固定してゐないのだから私自身にも恐らくは分らないだらう。

自然と人間のなかにはいると。
そのまんなかにはいつてゆくと。
かなしい湖が一つあります。
その湖がおのづから沸き。
怒りやよろこびに波うつとき。
かなしみうづき爆破するとき。
わたくしに詩は生れます。
日本の流れのなかにゐて。
自然と人間の大渾沌のまんなかから。

わたくしは世界の歴史を見ます。
湖の底に停車場があり。
わたくしは地下鐵にのつて方々にゆき。
また湖の底にかへつてきます。
なきながら歌ひながら。
また歌ひながらなきながら。
つきない時間のなかにゐます。

これは戰爭中に書いたもので「大白道」の序詩として收錄したものだが、これはいまでも嘘ではない。然しながら私の詩作の道程の、これが全部だといつてしまふと嘘になる。生れるといふことではなくて生むための構築もあるのだから。その方が大部分なのだから。

日本の流れのなかにゐることも今も矢張り同じで、それはボードレールがフランスの、ホイットマンがアメリカの流れのなかにゐてうたつたのと同じ意味の、ただ私が小さいだけである同じ意味での基盤をいつてゐるのである。さうした基盤がなくては世界性も、實はあり得ないといふ單純な考へから出てゐる。世界的人間像が普遍であるためには、人間對世界だけではなく、その人間に地理や血液もふくまれてゐるものとして世界に對するといふ考へ方を私はとつてゐる。だから私はリルケやエリオットにはなれない。それはリルケやエリオットが私になりたくないのと同じ意味である。ただちがふのは私が彼等のやうな將軍でないだけの話。

矢張り私にも祕密はある。この祕密をさらけ出しても私はちつとも痛痒を感じない。ところがさらけ出す方法がないのだ。數學のやうな明瞭さでは無論なくとも、あんまり模糊としてゐるからである。大して素質もないくせに人さまのやうに獨創を狙ふとかうした破目になるのかもしれない。

獨創——この恐しい敵愾心の發祥地は、亞流共の這入りこめる森林ではない。だから這入らうとする人間は獨創の系譜を自らの內部に持た

うとする不逞たちである筈だが、大概は逆襲されるのがオチである。（また亞流發展の美談もあり得るだらうとは思はれる）

口幅ったいことを言ふのは止さう。本當はどうも分らないのだ。ただ私にも分ることは、天が美しいためには天を書いたその作品が美しくなければならないといふことである。そこに詩といふものの存在がある――獨立した物質としての。

思考の時空的立場から詩人は聲を出さうとする。繪畫の線や色彩のやうに、聲は言葉を模索する。

そして私は最初にして最後の言葉を探らうと念願する。言葉は道具でもあるが生物でもあるので却々の代物である。人間を輕蔑すると復讐されるやうに言葉を甘く見ると言葉は近寄らない。近寄らない言葉を近寄らせるには強引な電磁力も必要になる。

素材としての對象に私はきくことにしてゐる。これらの言葉でいいのかと。君の存在はこれらの言葉によつて適確に表現されたかと。君であり同時に私であるその存在が頭を横に振つたなら、私は言葉の追及を繼續する。私は再びその對象の中にもぐりこんで最後の言葉を摑まうとする。その時實は、言葉は最初からたつた一つ、紙の上に移されることを用意して待機してゐるのだが、暗中模索はいつもこつち側である。ところがどうしても言葉がない場合がある。そんなときはどうしても新しいたつた一つを創らなければならない。從來の辭典にも、ものの本にもなかつたまるつきり新しいその言葉を創らなければならない。矢鱈に言葉を發明することは煩雜になつて有害ですらあるのだが、どうしても創らなければならない場合は創らなければならない。適確さのために、リアリティのために。

日本語は原始的で、非論理的で始末におへない面はあるが、また一面、男性（漢字）と女性（平假名）との混淆した姿は獨特の味をもつてゐる。そこへシュリケンのやうな片假名の投入も面白い。だから視覺的には一つの單語でも三つの性格を持ち得るわけである。

音に就いては、人々は、特に詩人はそのメロディアスでない點を悲觀する向きもあるが私はさうは思はない。立派にメロディアスだ。

ずつと昔のことになるが、大學でのポエトリミーティングで私が日本語の詩をよんだらアメリカ人がスペイン語によく似てゐるといつた。私ははつとした。そんなことを思つたことは一度もなかつたし、そのやうにメロディアスだとも思はなかつたから。はつとして私は日本語を英語の距離に置いてみた。そしてなんだかガテンがいくやうな氣持ちになつた。普通われわれは日常生活に於て英語その他の外國語は話さないから、英語その他の外國語は耳できくそれだけの距離がある。で、われわれが今度は日本語を話さないものとして、日本語を英語の距離においてきいてみる。どうしてなかなかである。

發音はまだ發展の餘地が充分にある。つまり研讃すれば發展の可能性は充分なのだが、さうしたことは組織的、科學的にはなされてゐないやうである。一部の學者の實驗室からはみ出し一般に浸透してゆくやうになれば音に對してもつと自信を持てるやうになるだらう。私たちは詩でそれを持ちたい。

けれども癖や宿命はないだらうか。それは多分にあるのだが、言葉や文章の構成だつて、もし必要ならばひつくり返るやうな革命をやつたつて惡いわけはあるまい。

私は相手の眞ん中にはいつてゆくやうな傾向がある。例へば富士山に關する詩を私は相當數書いたが、私にとつて富士山は海をくぐつてミクロネシアにつづく物質であり、內部は靜脈の

やうな地下水が縦にながれフジバザルト（編註＝玄武岩層）がその臀部なのだ。

また例へば蛙のことも相當書いたが、蛙と私と半分半分になりそれが一體となつて書くのであつて、だから私は冬眠の土の中へもぐつて行かなければならない。

アポリネールの「動物詩集」に對して私が不滿なのは、彼は眼鏡を透して只觀るだけだからである。それがヨーロッパ的な方法だとするならば私はその「ヨーロッパ」を採りたくない。春雨の一本一本のなかにはいつていつて。それから春雨の全體を私はみたいのである。

自分では氣がつかなかつたのだが、或る同人誌での評によつて、私が矢鱈に天を書いたことを知り、調べてみると成る程と思つていささかびつくりした。いままでの私の作品の數はどの位あるかは分らないが、それらの七十パアセント位の作品に天が登場するのである。エナメルの天、馬肉の天、猛烈な天、傾く天、書いてゆけば延々きりがない程なのをはじめて知つた。

富士を書いたのなども天からの傾斜であつたのかもしれない。富士の造型は天がなければ成りたたない。天がなければ富士は存在しない。

天ほど時空の渾然とした場はなささうである。海も似てゐるが海は地上にはない。天は海の上にもある。人類全部にとつて天ほどの普遍の場は他にはない。刻々變るその永遠。

「天體の研究程やりよいものはない、ただ少し遠いといふ憾みはあるが」それはポアンカレーの仕事でそれはそれで結構だが、私たちにとつては時空の磁場だ。無神者にとつては天以外に宗教はない。

筆者紹介　一九〇三年生。詩人。「蛙」「日本沙漠」「牡丹園」他。

「銅鑼」と「学校」

草野心平

「銅鑼」の創刊号の奥付けは次のようになっている。

「編輯兼発行者　草野心平　中華民国広州嶺南大学銅鑼社内　一九二五年四月発行　非売」

そして編輯後記の最後の方には次のような文句が書かれている。

「同人誌の雨生の中を、このみすぼらしいトウシャ刷りの出発だ。ぼく達の仕事がどんな風に進展してゆくか、眼のある人は見ていてくれるだろう。」どうも甘ったれた見栄で恥しい気持ちだが、その時はクソマジメにそんな風に感じたのだろうと思う。満でいえば二十二歳のときだった。

広州市の沙基という街に「広東日報」という日本文の週刊紙のちっちゃな印刷工場があった。そこの謄写版をかりて鉄筆書きからノリつけまで独りでやったものだが、改良半紙版二十二頁の小冊子である。表紙だけは印刷で春聯などにつかう牡丹赤の紙に「銅鑼」とすってある。この字は私が工場にあった割箸で書いたものだった。その後、日本に帰ってからも間歇的に続けられたが、相変らず謄写刷りだったり、活版印刷になったりもしたが、そんなときの表紙は大概はうすっぺらなハトロン紙だった。

兵庫県の山奥の坂本遼の家でつくったのは、謄写版はそこの小学校のものを借りてやったが、表紙は原稿用紙に一つ一つ銅鑼と筆で書いたりした。水戸の土方定一の下宿でつくったり、栃木県烏山の手塚武の実家でつくったり、平でつくったりといった具合で発行所も転々としていた。

昭和三年（一九二八年）までに十六号を出したが、年四冊平均ということになる。最後の頃は同人も大分ふえたが、中核的な連中といえば黄瀛、原理充雄、宮沢賢治、坂本遼、三好十郎、手塚武、土方定一、神谷暢、竹内てるよ、尾形亀之助、高橋新吉、碧静江、私など、それに高村光太郎や尾崎喜八なども寄稿してくれた。

「学校」の創刊については伊藤信吉が「現代詩の回想」（歴程六〇号）で次のように書いている。「たぶん東京の生活に追いつめら

れたのだろうか、昭和三年（一九二八年）の秋ころ、草野心平氏が前橋市へ『落ち延び』てきた。雑誌『学校』（昭和三年十二月創刊）はその草野氏が発刊の企画をし、運営の中心になり、横地正次郎氏と私が事務を助けた」云々。

創刊号が出たときは伊藤信吉は前橋にはいなかったらしく、第二号（昭和四年二月発行）から一緒にやったらしい。（同君の回想による）

伊藤君との出会いを私は印象深く憶えている。それが最初だったかどうかは判然しないが、前橋神明町の私の借家へ訪ねてきてくれたことがある。恐らくはその年の一月頃だったにちがいない。私は炬燵にはいっていたので彼にもすすめると、伊藤君もはいった。一瞬彼は妙な顔をしたが、うしろの押入れに背中をよりかけようとした彼は、ああッという叫びと共にあお向けになり押入れのなかにもぐってしまった。と同時に大風呂敷が彼の上半身をさえぎってしまった。押入れの下の方は木の骨も紙もなくなっていたので、それをかくすために鋲で大風呂敷をかけておいたのである。炬燵のなかには炭火はひとかけらもなかったが、それでも布団がのっかっているので、すこしはあったかい筈であった。

横地君も伊藤君も当時は親がかりで「東京から逃げもどった」伊藤君にも金のでどころはほとんどなかったろうと思う。そんないわば盛んな貧乏のなかから「学校」は生れたわけだが、だから謄写刷りだったことも極く自然な成行きだった。

前橋裁判所に小説を書いていた杉田鎌作君がいたので、私たちはそこの謄写版を借りることができた。小使室が私たちの仕事場だった。鉄筆で書くのは主に私だったが、時には伊藤君が書いたり横地君も書いたりした。刷り方やトジや、表紙の木版おしなどはみんなでした。表紙の木版は私が書いたものだが、あとで上京して高村家で話していたとき、智恵子さんが誰とかの字の感じがするといった。その中国の誰とかを私は知らなかったので聞きたださなかったが、ただそのことを妙に憶えている。

創刊号は七夕紙の赤をつかったが、以後は毎号コウゾ紙だった。創刊号には小野十三郎訳のマスターズ、横地、黄瀛、草野、高村光太郎の詩が載っている。ところですっかり忘れていたが、この創刊号には銅鑼社刊行書目のトジ込みがある。それには「銅鑼訳詩集」（菊版印刷送料共四十銭、一月上旬発行）とあり内容も出ている。「ヴェルハアレン…高村光太郎訳、トルラア…土方定一訳、モリス…神谷暢訳、マルチネ…尾崎喜八訳、馮乃超…黄瀛訳、マスターズ…小野十三郎訳、リヴェリー…萩原恭次郎訳、サンドバアグ…草野心平訳、マッケイ…土方定一訳、ヴィルドラック…尾崎喜八訳、ネスビット…神谷暢訳、ユトレイ…草野心平訳、郭沫若…黄瀛訳、ラッセル…萩原恭次郎訳、ダントン…土方定一訳、ロマン…尾崎喜八訳、ヂオヴァニッチ…草野心平訳」となっている。私がこの予告をすっかり忘れていたのはこの訳詩集は遂に上梓されなかったからだが、訳詩そのものは出来ていたのだったろうと思う。その他坂本遼の詩集『たんぽぽ』とか私の『第百階級』なども「一円四銭、残部僅少」なんて出ているが、近刊の広告としてはマルチネの「呪われた

時代」（尾崎喜八訳）トルラア「朝」（土方定一訳）サンドバアグ「煙と鋼鉄」（草野心平訳）山村暮鳥詩劇「海の族」高村光太郎「猛獣篇」黄瀛「中華民国詩抄」などとレイレイしく並んでいる。これらの本はどれも予告だけに終っている。貧乏ではあったにしても、やはり実行力に欠けていたことを証明しているようなものだ。なお、また「学校」については「謄写月刊詩雑誌百部限定定価二十銭送料二銭、頁は百頁にもなり六頁にもなるだろうこと予想します」などと書いてある。創刊は一九二八年十二月で終刊は一九二九年の九月、七号で終った。けれどもその翌年に「一九二九年版学校詩集」が俄然百七十頁の活版印刷であった。この詩集は伊藤信吉がほとんど独力でやり、私はまたもや前稿を落ちのびて福島の郷里にかえっていた。表紙のデザインと跋だけを私が書いた。跋にはこんなことが書かれている。

「北海道三人、岩手県一人、千葉県二人、群馬県三人、東京府十四人、東京市七人、静岡県二人、愛知県一人、兵庫県一人、鹿児島県二人、以上がわれ達の分布図である。唐突の出版のために当然此輯に名を連らねてもらいたい多数の仲間を逸した。来年はさらにわれ達の陣野を拡大し何倍もの重圧を加えるであろう」とひどく元気ぶってはいるが、一九三〇年版の「学校詩集」は実現しなかった。（この原稿を私はいま昭森社のデスクで書いているために、全部揃ってはいないにしても「銅鑼」はばらばらには自宅に持っている。それらの後記を見れば、恐らく「学校」の出版予定目録のように、相当数の単行本が出るはずであった。しかしそれも「学校」の予告とおなじく、うやむやののちにおわったものが大部分だった。出版名義人や編輯名義人が、あっちこっちと放浪していたのだから止むを得ないと一応は言いわけもたつが、結局のところは、やはり実行力にかけていたところがあったからだと、今さらながらやろうとしたときは、その時にやっておくべきものだと、二つの雑誌に逆に訓戒されてるような気持ちにもなる。けれどもそれが実行できなかったことも一つの宿命だったかも知れない。）

上「銅鑼」創刊号
下「学校」創刊号

松永延造の『夢を喰ふ人』　草野心平

松永延造の『夢を喰ふ人』を私にすすめたのは当時水戸の高等学校生だった土方定一である。私が彼にすすめたのではなく彼が私にすすめたのだったと思う。

或る時期を彼は週に一回は上京していたようだが、その度ごとに私たちは会っていたように思う。その私たちに、詩人では宮沢賢治、作家では『夢を喰ふ人』の著者松永延造が共通の話題に度々なった。二人とも未知の人たちであった。

それは大正十五年頃だったが、約十年後の昭和十年に私ははじめて松永延造との交渉をもった。「歴程」に原稿を依頼したことによってである。そして彼も歴程の同人になった。

辻淳君の「松永延造年譜」（歴程七九号所載）によると延造は昭和十三年、四十四才で死んでいる。賢治の写真を見たのは、その死後一週間目だったが、松永延造の風貌をその写真ではじめて知ったのはつい去年のこと、死後二十三年目にである。殆んどその一生をカリエスで苦しんだというにしては余りにも強いはげしい顔だ。

昭和十五年の歴程第十号に私は「松永延造氏不明」という一文を書き、その拙文を読んだ佐藤惣之助が歴程十一号に「松永延造を探せ」という文章を書いた。その頃私の出したハガキ類は符箋つきで返送されていたことが、私の一文のきつかけになったわけだが、うかつにもその約一年前に松永延造は死んでいた。

『夢を喰ふ人』を私は、曽て著者から借りたことがある。それは恐らくはその死の前年の昭和十二年あたりだったと思う。以前もっていたその本がなくなり、多分何か書くための参考に借りたのだと思うが、その一本は大変奇妙なものだった。それは著者が所持していたたった一冊だったらしい。あっちこっちの頁はペンで×がひかれ、また四百字詰の原稿が二十枚ほど新しく書かれたものが、二つ折に集められて然るべき頁の間にノリではりつけられてあった。『夢を喰ふ人』のそれは、いわば改訂決定版といえるものであった。大事にするため三ツ村

表現者としてのアナキスト

草野心平とモダニズム詩／プロレタリア詩

澤 正宏

1　現代詩の最初の高揚期と草野心平

一九二〇（大9）年代に入ると、日本の詩はますます現代詩としての特色を濃厚にしていくが、この二〇年代中頃から三〇（昭5）年代中頃にかけては、草野心平にとって彼らしい独自の詩の表現が獲得された時期でもあった。それは、詩作の出発期を経て、草野心平の詩の表現が、近代から現代へと変貌し変質していく社会情勢、既存の文化などの影響を受けながら、新たな次の段階を形成した時期であったということであり、これが日本の現代詩が最初に隆盛をきわめた時期であったことを考えるならば、草野心平がこの時期にどのような詩観や詩の表現を獲得していたのかという問題は考察の余地のある問題であろう。この論考では、草野心平以外の現代詩の特色、動向と関わらせながら、元号でいえば大正十四（一九二五）年から昭和十（一九三五）年頃までに時期を限定してこの問題を追究してみたい。

草野心平が、「私達は日本の現在の詩壇のやうに、アメリカでも芸術主義者とプロレタリヤ派との対立をみる」（「アメリプロレタリア詩寸感」、「詩神」昭5・9）と述べているように、彼は芸術主義者とプロレタリア詩とが昭和初期の頃の日本の現代詩を二分していることを明確に認識している。では、心平の書く詩はどのような特色があったのだろうか。ここでは、芸術至上主義の詩を、主に大正末期から昭和初頭にかけて出現した前衛詩と、「詩と詩論」創刊（昭3・9）以降、この詩誌の影響下で詩を専ら主知的、理智的に書いた詩とを一緒にした、広い意味でのモダニズム詩と言い換えて使っていくことにしたい。

2　心平とモダニズム詩

自筆謄写印刷版の詩集『踏青』（大13・12）を発行した前後より、心平にはモダニズム詩とみなしてよいような表現がみられだす。例えば、詩「マリー・ローランサンとぼく」（「銅鑼」大14・4）における、蛙らしき語り手が、人間の女性の「前こごみになった横っ

腹から下に／するどく眼をつきさした」際の、「唇に／カンナのやうな舌がふるへた」という表現や、詩「病後」（「顔・顔」大15・1）における、「新鮮な草」と「氾濫」する光り」という自然のなかで、病後の身体に「歓喜が／蜂の巣のやうに泡だつ」という表現などがそうである。前者は女性の肉体から、後者は眩しい自然からそれぞれ受けた強烈な刺激を鋭く的確なイメージで表現しており、前者の、性欲の強度と質とを攻撃の衝動性を秘めた刃物で比喩するといった表現や、後者の、痩身に湧き上がってくる歓喜を、小動物が絶えず発する唸るような力強い振動（音）の視覚化で表現するといった点がモダニズム的なのである。

だが、これらの表現には前時代の近代詩の表現を破壊していく前衛性がなく、主知への傾斜もみられない。これらはモダニズム詩としてはめずらしく、対象の知覚に起因した感覚的な表現が詩の語り手の身体と密接につながっている表現であり、この意味で詩の語り手と詩の書ぎ手である心平との距離の近さを感じさせる。また、前者のような表現は心平の詩のひとつの基調をなしており、詩集『明日は天気だ』（昭6・9）に所収の、

血ヘドが出たといふことは　血が口から出たといふことだ
痔血が出るといふことは　血が肛門から出るといふことだ
余分な血が出ると思へば　笑ひごとにもなるだらうことだ
おまへとおれと　口とケツから
だんだん血と仲よしになるといふことは仲よしになるといふことぢやないか
世界中にこんなカップルがうんとこさあるだらうことは力ぢやないか

（全、同前詩集より引用）

という表現にみられる、吐血と痔血とを体験した二人の人間を、口と尻とを出血で結んだうえで「仲よし」にし、世界中にある「力」としている詩「血の話」などと合わせて考えれば、それは性的、生理的な表現だということがいえる。もちろんこの詩も、出血によって消化器官の両端である口と尻とを結びつけ、さらにこの結合が二人の人間をも結びつけるという、遠い関係にあるもの同士を結びつける手法が二重に駆使されているとみればモダニズム詩なのである。

他に、心平のモダニズム詩としては、

俺はもう何もかも人間より大きいんだ

舌をお出し
おい手はうしろへまはすんだよ
もつとお出し　うんとお出し
俺は舌をつまんで
舌をつまんで人間をつまみあげる

（無題、部分『太平洋詩人』第二巻第一号、昭2・1）

というように人間より大きくなった娃が「舌をつまんで人間をつまみあげる」と表現された詩や、

DDDDDDD　DDDDDDD　DDDDDDD
ラヴァは低きに向つて西に流れ東に流れる
混沌は混沌に衝突し更に混沌し
動力はツナミをなして盛り上る
眼界萬里・赤と黒のだんだらの動揺
獰猛な○性の烈烈
DDDDDDD　DDDDDDD　DDDDDDD
ラヴァは南に流れ北に流れる
焼け爛れた空には一點の雲なく
gigigigigigiiiiiiiiiiiiiii
エーテルの十二色律動をつき破つて
サフアイヤ電光が天心にむかつて龍巻きする

（詩「地球が出来上つたあくる日の風景」全、同前詩誌第二巻第三号、昭2・3）

と表現された詩などがある。前者が夢想によるあり得ない表現であり、地上の征服者である人間を創造力によって虐める点で、後者が川の流れと空に向かう電光の動きとを擬声語、擬態語としてアルファベットの活字で表現している点で、ともに言葉の意味をラディカルに破壊するまでにはなっていないものの、これらの詩はそれぞれダダイズムの詩といってもよかろう。また、

るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

（詩、「蛙・生殖　3」全、同前詩誌第一巻第四号、大15・12）

とか、

●

（詩、「蛙・冬眠」全、同前詩誌第二巻第三号、昭2・3）

といった表現は、前者が蛙の卵と声の、後者が冬眠期の土中の蛙の姿の、それぞれ記号化された言葉や言葉ではない記号による形象化であって、具体的なものの形や音声の、感性に基づいた簡潔なデフォルメによる視覚化という点でイマジズムの詩やキュビスム的な詩になっていると考えてもよかろう。そして、心平のモダニズム詩に他者の表現とは際立つ前衛性をみようとするならば、それは現実社会や既成の価値観などに対する反逆性が稀少な彼のダダイズムの表現にではなく、彼のイマジズムの表現やキュビスム的な表現にあるといってよいだろう。もちろん、心平は主知に拠るモダニズム詩は批判している。

3 心平とプロレタリア詩

心平は、「プロレタリア詩の前途は洋々たるものがある。詩に於ける他の如何なる分派よりもそれは歴史的に正しい。（中略）他は悉く生きながらにして死滅するであらう」（「プロクリア詩の分野とその技術に就いてのノート」、「弾道」昭5・9）と述べ、自らをプロレタリア詩を書く詩人の位置に置いている。また、小野十三郎は心平の詩に「プロレタリヤの物凄い反抗意識の一端」

を見いだし、彼を「プロレタリヤ詩人」（ともに「明日は天気だ」、「詩神」昭6・12）と規定している。はたして心平はプロレクリア詩の特色をもった詩を書いたのだろうか。

詩集『第百階級』（昭3・11）を読むと、

石がぶつかれば死ぬる位なことはちやんと知つてゐるのだ
ビリビリふるへてゐるのだ
しかもその恐怖をぐつと圧へ殺して
平然と石をまつ途方もない捨鉢ち！
宇宙大のニヒル！

人間は一立方寸の蛙を知つてゐるのだ
ひろーい無限の虚無圏――
蛙はその中の人間・石を投げる人間
顕微鏡的一点を微笑するのだ

（詩、「だから石をなげれるのだ／だから石をうけれるのだ」全、同前詩集より引用）

などという表現から、語り手が宇宙は虚無であるという認識をしていることがわかる。この詩集はこの認識を根底におきながら、語り手を媒介にした、自然からの激発（詩「嵐と罪」参照）や、地上に充満する幾億の蛙（詩「行進曲」参照）などの表現によって、虚無（ニヒル）に浸ることなく書き進められているのである。

しかし、この詩集の蛙を中心に据えた表現には、十八歳のとき入学（大10・9）した嶺南大学の池の蛙に、「性に目覚めるころだったんで、カエルの声やなんかからセックスも感じた」（「神戸新聞」昭61・6・10）というように、思春期での蛙との出会いから始まっている蛙の性や生理の表現が払拭されておらず、

布団がある
ついにビクビクふくみ笑つた
額に手をあてると青い汁がでてゐる

ゲルは舌を長くして
女のからだをあるいた
不浄期の○○に頭をいれた
泥血をのみすぎて死んでしまつた

眉毛一つ動かうとしない
女はしづかに眠つてゐる

（詩、「ゲル」第二連～第四連、同前詩集より引用）

というように、詩「ゲル」などは性的な鬱屈、倒錯（サディズム、マゾヒズム）の表現を引ぎずって来ている。また、

痛いのは当りまへぢやないか
声をたてるのも当りまへだらうぢやないか
ギリギリ喰はれてゐるんだから
おれはちつとも泣かないんだが
遠くでするコーラスにあはして唄ひたいんだが
泣き出すことも当りまへぢやないか
みんな生理的なお話ぢやないか
どてつぱらから両脚はグチヤグチヤ喰ひちぎられてしまつて

解題

〔書誌〕初出資料（詩誌、雑誌、新聞など）一覧

―一九二三（大正一二）年～一九七五（昭和五〇）年――

一九二三（大正一二）年～一九七五（昭和五〇）年

一九二三（大正一二）年

○詩「無題」（詩誌『詩聖』第一七号、玄文社、三月一日）。

・編輯兼発行人は野村久太郎、印刷人は内田廣蔵。発行所の住所は「東京芝公園九號地」。目次には「第十八號」と記載されているが誤記。この詩「無題」は「推薦」の欄に掲載、同欄には、他に「黄贏」らの詩も掲載されている。

○詩「赤い夕月とまつてゐる」〔詩誌『想苑』第三巻第五号、想苑社（大阪、東京）、一〇月一日〕。

・編輯兼発行人は小松一朗（兵庫県武庫郡鳴尾西畑）、印刷人は横山常久（大阪市北区西梅ケ枝町八八二）。編輯集同人には佐藤清、竹内勝太郎らがいた。「編輯後記」（小松一朗）では、関東大震災が機縁となる文芸上の新機軸の予感を記し、「頑迷な人達は依然東京でなければ文藝は生れないもの、育たないものと決め込んでゐるから滑稽だ」「關西にゐる私等が關西の文藝を生むに何の不思議があらう」とも記している。

○詩二篇「虫よ」「まんだらな夕景」〔詩誌『想苑』第四巻第一号、想苑社（大阪、東京）、一二月一日〕。
・「編輯同人」には竹内勝太郎、佐藤清らがいる。

一九二四（大正一三）年

○詩「淋しい一本道」（詩誌『帆船』第三年一月号、帆船詩社、一月一日）。
・編輯兼発行人は多田不二、印刷人は村上信助。多田不二と発行所との住所は同じで、「東京市外大久保百人町一九五」。「編輯の後に」で、笹澤美明が関東大震災後に厳父を失ったと記している。なお、詩誌『帆船』は第一次（一九二二年三月から一三年一一月まで、全二四冊）と、第二次（二六年六月から二七年三月まで、全四冊）とに分かれる。

○詩二篇「少さな書齊兼寢室の悲劇」「無題」（詩誌『毒草』第三巻第一号、毒草社、一九二四年一月一日）。
・発行兼編輯人は藤原弘、印刷人は川村次郎。発行所（毒草社）の住所は「名古屋市中區御器所町天神東四三」。雑誌末尾の「毒草清記」には、「毒草は伸びんとする人々の爲に自由に開放す」とある。「同人」「準同人」「社友」を設け、「詩」「短歌」「感想、評論」「雑筆」の原稿募集を行っている。なお、詩誌『毒草』所収の草野心平の全詩篇の掲載は、所蔵機関である「いわき市立草野心平記念文学館」より許可を頂いた。

○詩二篇「秋の僧院」「居留地夕景情緒」（詩誌『毒草』第三巻第二号、毒草社、二月一日）。
・編輯人は大口勝利。発行人は藤原弘、印刷人は井上金作。発行所（毒草社）の住所は「名古屋市東區

杉村町東杉」。掲載された二篇の詩の末尾に「詩集癈園の喇叭より」とある。

○詩「**月夜の馬**」（詩誌『毒草』第三巻第四号、毒草社、四月一日）。

・奥付と「目次」には「第三巻第四號」とあるが、表紙、裏表紙には「第三巻第三號」とある。同年三月に「三號」が発行されていれば「四號」が正しい表記である。

○詩二篇「**月夜の冒瀆―古代埃及叙景詩―**」「**月夜の遠火事**」（詩誌『帆船』第三年三月号、帆船詩社、二月一〇日）。

・奥付の「寄贈書目」の欄に草野心平著『詩集 癈園の喇叭』（「定價八十錢、福島縣タイヤン社發行」）が載っている。

○詩二篇「**魚形水雷の如く**」「**革命を前に**」（詩誌『帆船』第三年四月号、帆船詩社、四月五日）。

・編輯後記に「創刊三週年に達した」とある。同、「寄贈書目」の欄には草野心平著『詩集 空と電柱』（謄写版、支那關東嶺南大學内、定價一五錢）が載り、「駈けて來た手其他二十篇の詩が収められ」「南支那の特異な情趣が漂つてゐる」と記されている。また、「編輯同人」として笹澤美明、原丈、泉浩郎、中田信子、畑中靜榮、林信一、富田允、城所英一、多田不二らが、「同人」として東光、難波英夫、鈴木頴兒、千石喜久、草野心平、岡田刀水士、佐々木太一らが記載されている。

○詩二篇「**ゆがんだ顔**」「**ベンチにて**」（詩誌『帆船』第三年五月号、帆船詩社、五月一日）。

○詩「**夜更け**」（詩誌『帆船』第三年六月号、帆船詩社、六月一日）。

・「編輯後記」には、「詩と云へば抒情と叙事に限局されてゐると思つたら大變な違ひだ。（中略）社秘も好い現實も好い、幻想だつて惡くない」とある。

○詩「怠惰な風景」（詩誌『毒草』第三巻第五号、毒草社、六月一日）。

・編輯人は高橋一夫、発行人は藤原弘、印刷人は竹原勝正。発行所（毒草社）の住所は「名古屋市東區富士塚町二丁目」。「詩」「短歌」「感想、評論」「雑筆」を募集している。奥付には「第三巻第四號」とあるが、「四號」は同年四月に発行されているので誤記である。

○詩三篇「合歡木と月」「かなしさ」「カンナ」（詩誌『帆船』第三年七月号、帆船詩社、七月五日）。

・奥付の頁の「私信に代へて」や「消息」欄で、多田不二は自分が嘗て「千島」にいたこと、金澤の室生犀星宅に二、三日滞在したことなどを記している。

○「秋の朝（―南支廣東にて―）」（『東京朝日新聞』第一万三千八百八号、一一月八日）。

・五頁の「學藝」の欄に掲載。同頁には白鳥省吾の随筆「農民の生活と文學―旅の印象から―」（三）も掲載されている。

一九二五（大正一四）年

○詩六篇「マリー・ローランサンとぼく―或る夢の貌―」「蛙になる」「失戀者と蛙」「春」「春の刺激」「青い場面」〔詩誌『銅鑼』創刊号、銅鑼社、四月（日附けの記述なし）〕。

・編輯後記に「創刊號」とある。詩篇は手書きで謄写版刷り。編輯兼発行者は草野心平。発行場所は

「中華民國廣州嶺南大學銅鑼社内」、頁数は附されていない。「非賣」品。

○詩六篇「無題」「再びマンモス時代」「木登りをする女」「青い水たんぼ」「無題」「驟雨直後」〔詩誌『銅鑼』第二号、銅鑼社、五月（日附けの記述なし）〕。

・号数の表記は表紙に「№2」とある。詩篇は手書きで謄写版刷り。

○詩二篇「蛙・生殖」「病氣」（詩誌『銅鑼』第三号、銅鑼社、発行年月日不詳）。

・奥付には発行年月日の記述はない。奥付には謄写版刷りで「発行 東京麹町飯田町二の五三 曽方銅鑼社」とある。詩二篇も手書きで謄写版刷り。

○詩「無題」（『東京朝日新聞』第一万四千四十七号、七月五日）。

・六頁の「讀書ページ」の欄に掲載。

○詩二篇「蛙・中性」「無題―未定稿―」（詩誌『銅鑼』第四号、銅鑼社、九月八日）。

・目次、奥付はない。詩二篇は手書きで謄写版刷り。

○詩七篇「愛犬ルリパロと私の散歩」「蛙の散歩」「宵祭り」「秋」「無題」「朗らかな夕景」「一人への詩」（詩誌『銅鑼』第五号、銅鑼社、一〇月二七日）。

・頁数が附されている。詩七篇はすべて手書きで謄写版刷り。発行所は牛込区下戸塚五二六 近衛館内 銅鑼社。「同人」全九名が初めて記される。同人は掲載順に原理充雄、黄嬴（ママ）、草野心平、宮澤賢治、三好十郎、岡田刀水士、坂本遼、高畠貞夫、髙橋信吉である。

一九二六（大正一五・昭和元）年

○詩四篇「無題」「秋」「蛙・晴天」「Nocturne. Moon and Frogs.」（詩誌『銅鑼』第六号、銅鑼社、一月一日）。

・この号は活字印刷。「同人」に赤木健介が参加する。

○詩三篇「蛙・一匹を慕ふ二匹の會話」「蛙つりをする子供と蛙」「失戀者と蛙の風景」（雑誌『月曜』第一巻第二号、恵風館、二月一日）。

・「編輯者」は尾形亀之助、発行者は鈴木恵一。発行所の住所は「東京市芝區白金三光町五」。尾形亀之助の住所は東京府下上落合七四二」。

○詩「五匹の蛙」（雑誌『月曜』第一巻第三号、月曜社、四月一日）。

・編輯発行兼印刷者は尾形亀之助、門脇文。発行所は月曜社となり、住所は尾形亀之助の住所に同じ。「編輯後記」に「『月曜』は一個の本屋の機關雑誌ではない」「文壇といふ背景を更にもたない」とある。

○詩「蛙・コーラス」（雑誌『文藝市場』第二巻第五号、文芸市場社、五月一日）。

・「編輯代表」は梅原北明、発行兼印刷人は伊藤敬次郎。発行所の住所は「東京市小石川區林町五七」。この号は「文壇今昔物語」を特輯している。

○詩二篇　総題「蛙詩篇」（詩「32　水素のやうに熱い悲劇」、詩「33　吉原の火事映る田に鳴く蛙」

解題

初出資料（詩誌、雑誌、新聞など）一覧

―一九二五（大正一四）年～一九七五（昭和五〇）年――

一九二五（大正一四）年～一九七五（昭和五〇）年

〔翻訳詩〕

一九二八（昭和三）年

○翻訳詩「坑夫の歌」W・H・ユトレイ（詩誌『銅鑼』第一三号、銅鑼社、二月一日）。

・『銅鑼』（全一六冊、一九二五年四月～二八年六月）は「編輯兼發行者」を草野心平とし、「發行所」を中華民国広州嶺南大学内として発行された（非売）。最初期の「同人」は黄瀛、原理充雄、劉燧元、富田彬、草野心平である。第一号～第五号、第七、一〇号がガリ版で、他は活版印刷である。第四号からは宮澤賢治も同人となる。第一三号以降はアナキズム色が濃くなるが、個人主義的な自由主義が基盤であり、徹底して土に生きた農民詩人の三野混沌（第一一号より参加）や、猪狩満直（第一三号より参加）らも受け止めている。この詩誌は『学校』（全七冊、一九二八年一二月～二九年一〇月）、『歴程』（第一次は全二六冊、一九三五年五月～四四年三月）へと受け継がれていった。

この号の「印刷人」は陶山篤太郎で住所は「川崎市宮前町九番地」。「發行所」である銅鑼社と草野心平の住所とは同じで、「東京府大森八景坂二三一九」。「後記」には「銅鑼支社」が栃木県烏山町（手塚武方）、北海道

釧路（猪狩満直方）、盛岡市（森佐一方）、高崎市（岡田刀水士方）、上海（萩原貞雄方）、福島県好間村（三野混沌方）にできたことが報告されている。

○**翻訳詩「塀」カール・サンドバアグ**（詩誌『銅鑼』第一四号、銅鑼社、三月一〇日）。

・この号の「後記」（神谷暢）には、「銅鑼支社」が鹿児島市（小野整方）、姫路市（坂本遼方）にもできたとある。また、小野十三郎訳のソレルの『暴力論』（金星堂）が出版されたともある。草野心平訳の詩「塀」は、ともに一九三一年刊行の『アメリカプロレタリア詩集』『黒色戰線』（ともに後述）にも掲載されている。

○**翻訳詩「シカゴ」カール・サンドバアグ**（詩誌『銅鑼』第一五号、銅鑼社、五月一日）。

○**翻訳詩「嘘ツキ」カール・サンドバーグ**（詩誌『銅鑼』第一六号、銅鑼社、六月一日）。

・「編輯兼發行者」は寺田鄭、発行所である銅鑼社の住所は寺田鄭の住所と同じ、「東京市外杉並町成宗三四」。「後記」に「草野心平君、當分住所不定」とあり、「東京市外原宿一七〇、神谷氣附」が代行するとある。「銅鑼支社」が上海にもう一つできたともある（内堀勝利方）。また、山村暮鳥の「海の族」の入会者に高村光太郎、佐藤惣之助、尾崎喜八、安藤一郎、陶山篤太郎、更科源蔵らがあったと記している。

○**翻訳詩（散文詩）「歩く者」アルチユロ・ヂオヴアニツチ**（詩誌『詩神』第四巻第一一号、詩神社、一一月一日）。

・『詩神』（全七二冊か、一九二五年九月～三一年一二月か）については本資料集の第一巻の「一九二八年」の項を参照のこと。田中清一を編輯兼発行者として出発した『詩神』（第七巻第八号が終刊号か）は、日本の詩が「近代」から「現代」へと変貌する時期に刊行された詩誌で、多くの訳詩や外国詩人の紹介に力を入れたことも特色になっている。第三巻第五号以降は目立って新しい詩学やプロレタリア詩などを紹介し始め、最盛期となる第五巻以降では、日本や世界の詩の現状に接近していった。しかし、第七巻以降は同時代の現代詩の動向から

は遅れがちになっていった。

ここに訳載された作者の「アルチユロ・ヂオヴアニツチ」はアメリカの詩人である。草野心平は同じ『詩神』の第五巻第九号（一九二九年九月）にも同詩人の詩を訳載しているが、訳詩の末尾でこの詩人のことを、「代表作は殆んど原稿紙十五枚以上の長詩である。（中略）ロマンテイツクの匂ひの鼻につくのは、吾々との年代の差違であ」ると記している。

一九二九（昭和四）年

○翻訳詩（散文詩）「子供の口から」アルティウロ・ヂオヴニッティ（詩誌『詩神』第五巻第九号、詩神社、九月一日）。

・「世界詩壇譯詩」の欄に掲載。

一九三〇（昭和五）年

○翻訳詩二篇「一時的平等」ロオズ・ザグノニ・マリノニ、「葬式」ジョセフ・カアラー（詩誌『詩神』第六巻第八号、詩神社、八月一日）。

一九三一（昭和六）年

○翻訳詩九篇「同志に送る」アルチユウロ・ヂオヴアニツチ、「歩く者」同前、「丘」スプンリバア、「サツコとヴアンゼツチ」イスラエル・カスヴアン、「創造に従事する人間の海」同前、「シカゴ」カアル・サンドバアグ、

「嘘ツキ」同前、「ダイナマイト所持者」同前、「塀」同前（『アメリカプロレタリア詩集』弾道社、一月一日）。

・著作者は小野十三郎、発行者は秋山清、発行所である弾道社の住所は発行者と同じで、東京市外下落合一三七九。これは小野十三郎、萩原恭次郎、草野心平らが翻訳した詩集である。草野心平が訳した詩人では、Arturo Giovanitti、Israel Casyan、Carl Sandburg についてはアルファベットでの人名表記がある。後記には「現在アメリカのプロレタリア詩人群より特にわが自由聯合の陣営に属する、或はそれに近い仲間十五人を選んでなつたもの」とある。

○翻訳詩二篇　「イーストサイドの夜明け」ポーター・ミロン・チヤッフキー、「ミシシッピの農夫」チヤーレス・ヘンリ・フォード（詩誌『詩神』第七巻第二号、詩神社、二月一日）。

○翻訳詩「塀」カアル・サンドバアグ（無政府主義文藝思想誌『黒色戰線』（第二次）第一巻第一号、黒色戦線社、一九三一年九月一日）。

・「發行編輯兼印刷人」は鈴木靖之、発行所である黒色戦線社の住所は東京府目黒町下目黒九三〇。無政府主義を文化運動として広めようとし、『文藝戰線』を意識して創刊された、第一次『黒色戰線』（一九二九年二月～一二月、全七冊）が内（思想上の対立）と外（第三、四号の発禁処分など）との事情で終刊した後、星野準二、相沢尚夫らはアナキズムの思想宣伝雑誌『黒旗』（一九三〇年一月～三一年五月）を創刊する。第二次『黒色戰線』（一九三一年九月～三二年一一月、全八冊）はこの『黒旗』の後継雑誌で理想的で観念的なアナキズム理論を説いた。

この雑誌には草野心平の他に、詩を萩原恭次郎、小野十三郎、局清、伊藤和、竹内てるよらが掲載している。

一九三二（昭和七）年

○翻訳詩（散文詩）「歩く者」アルツウロ・ヂオヴニッチ（詩誌『新詩論』第1輯、アトリエ社、一〇月二〇日）。

・編輯者は吉田一穂、発行所であるアトリエ社の住所は、東京市牛込区喜久井町三四。『新詩論』（一九三二年一〇月～三三年一〇月、全三冊）は、一九二〇年代の終わりから三〇年代の始めにかけて出され、日本のモダニズム系の現代詩の大きな流れを形成した『詩と詩論』（全一四冊、別冊二）を意識して出された、詩の発想の独自性を尊重しつつ、総合的なポエジイ運動を目論んだ詩誌である。

第1輯では「アルテユウル・ラムボウ研究」を特集している。「翻訳」欄（詩篇）では草野心平の他に、菱山修三がヴァレリイを、安藤一郎がハーバート・リードを、増田篤夫がクロオデルを、尾崎喜八がデュアメルをそれぞれ訳載している。

なお、草野心平訳「歩く者」は、既に彼自身が『詩神』第四巻第一一号や『アメリカプロレタリア詩集』などに掲載している（本資料集、第三巻の「翻訳詩」の欄を参照のこと）。

〔評論、詩論、随筆、書評、選評、編輯後記、覚書、報告文など〕

一九二五（大正一四）年

○随筆「後記」〔詩誌『銅鑼』創刊号、銅鑼社、四月（日附けの記述なし）〕。

・「編輯兼發行者」は草野心平、発行所である銅鑼社の住所は、「中華民國廣州嶺南大學」内。謄写版印刷で「非賣」品。

○評論「福田正夫の沒落」／編輯後記「寸言」〔詩誌『銅鑼』第二号、銅鑼社、五月（日附けの記述なし）〕。
・『銅鑼』第二号については本資料集の第一巻を参照のこと。原稿は手書きで謄写版印刷。後書きに当たる「寸言」のタイトルは、この詩誌の表紙では「馬人馬語」となっている。そこには「一号をだした時は全く幻滅を感じてしまった。よそうかと思った程だ、（中略）一号よりは二十部多くすった。」と記載されている。
○随筆「後記」（詩誌『銅鑼』第五号、銅鑼社、一〇月二七日）。
・『銅鑼』第五号については本資料集の第一巻を参照のこと。

一九二六（大正一五、昭和元）年
○随筆「後記」（詩誌『銅鑼』第六号、銅鑼社、一月一日）。
・『銅鑼』第六号については本資料集の第一巻を参照のこと。
○書評「『色ガラスの街』に就いて—随筆的デツサン批評—」（詩誌『近代詩歌』第二巻第五号、近代詩社、五月一日）。
・『近代詩歌』第二巻第五号については本資料集の第一巻を参照のこと。
○評論「散彈的月評」（詩誌『近代詩歌』第二巻第六号、近代詩社、六月一日）。
・『近代詩歌』第二巻第六号については本資料集の第一巻を参照のこと。

一九二七（昭和二）年
○評論「雜誌批評」（詩誌『太平洋詩人』第二巻第一号、ミスマル社、一月一日）。

草野心平研究資料集　第3巻

発　　行　2023年9月30日　初版第1刷

底　　本　詩誌・雑誌・新聞など

発 行 者　川 角 功 成

発 行 所　有限会社 クロスカルチャー出版
〒101-0064　東京都千代田区神田猿楽町 2-7-6
TEL 03(5577)6707　　FAX 03(5577)6708

印刷・製本　石川特殊特急製本株式会社

ISBN 978-4-910672-26-7　C3392(第1回配本・全3巻セット)
ISBN 978-4-910672-29-8　C3392(第3巻)

2023 Printed in Japan